500
26

始

[illegible]校正

[illegible]術[illegible]解[illegible]集

版權[illegible]藏

[illegible]

500-26

坪内逍遥
渥美清太郎 共編

歌舞伎脚本傑作集

第十二巻

萬作[illegible]
如皐

傾城青陽鶏
御攝曽我閏正月

12. 1.27
内交

豊国画

市川團十郎
市川男女蔵
豊國画

500-26

文學博士 坪内逍遙
渥美清太郎 共編

第十二巻

歌舞伎脚本傑作集

東京 春陽堂發行

目次

辰岡萬作及二世瀨川如皐小傳……卷頭
「傾城青陽鶴」解題……
同本文……一頁―四八三頁
「御攝會我閏正月」解題……
同本文……四八五頁―五七〇頁

插繪目次

「御攝曾我閏正月」錦繪（色刷り木版。初世歌川豐國筆）……卷頭
「傾城靑陽鷃」役割番附二種及繪番附一種……一頁の前
同繪番附表紙……九頁の前
同序幕以下……三三頁の前
同三幕目以下……二三五頁の前
「大和橋」錦繪（コロタイプ版。一陽齋豐國畫）……三三七頁の前
同繪番附大詰まで……三六九頁の前
「御攝曾我閏正月」錦繪（コロタイプ版。初世歌川豐國筆）……四九七頁の前
同（コロタイプ版。五渡亭國貞畫）……五二一頁の前

辰岡萬作及二世瀨川如皐小傳

辰岡萬作は、初世並木五瓶と並んで、京阪の劇界に名を擧げた作者でした。つまり、寶曆から明和安永へかけては、奈河龜助の壇場でしたが、寬政から享和へかけては五瓶と萬作との世界になつてしまつたのです。

寬保二年の生れで、父は辰岡久菊といふ、當時の中所にゐた女形俳優でした。何年ごろ作者になつたのか・また、誰れの門下になつたのか、分明ではありませんが、安永の初年には、二枚目の作者として可成りに活動してゐたやうです。立作者となつたのは安永七年だといふことです。

萬作は、「金襖物」卽ち時代物が何より得意でした。彼れの傑作といふのは、大抵は時代物です。今こゝに、彼れの作といふことが解つてゐる脚本だけを列擧して見ませう。

初嵐元文噺（はつあらしげんぶんばなし）

寬政元年、中座上演——早田八右衞門が曾根崎の五人斬りを脚色したもので、歌舞伎での脚色は是れが初めてゞす。

忠孝譽二街

寛政四年九月、角座上演──南北も作つた「合法ヶ辻の仇討」を脚色したものです。

けいせい楊柳櫻

寛政五年一月、中座上演──世界を足利にとつて、時代物を柳澤騒動、世話を淀屋辰五郎と、一幕置きに見せた通し狂言です。非常な好評で、維新前には唯一の柳澤騒動の狂言として、隨分度々上演されたものです。

東海道戀の關札

寛政五年四月、中座上演──尾上新七が伊達新左衞門で、非常に當てたお家物です。「男重の井」の最初で、今殘つてゐるのは此狂言を多少訂正したものです。

けいせい青陽鶴

寛政六年一月、角座上演──本集所載。

吉原細見圖

寛政五年五月、中座上演──傾城花扇と、遠山甚三郎といふ侍ひとの心中譚で、二幕の短

い世話物です。これも後に度々上場されました。

姉妹達大磯

寛政七年一月、角座上演──宮城野信夫の仇討を脚色したもので、非常に行はれました。同じ題材でも江戸では「碁太平記白石噺」が流行しましたが、大阪では是ればかりが演じられてゐたものです。

艶競石川染

寛政八年四月、角座上演──これは今も殘つてゐる「石田の局」の狂言で、嵐雛助が石田の局と石川五右衞門とを變つて見せました。五右衞門が葛籠を脊負つた形は、此狂言に初めて見えてゐます。

けいせい遊山櫻

寛政九年一月、中座上演──毒酒の加藤清正を脚色した狂言で、同じ趣向の院本「八陣守護城」よりは先きに出來たものです。桃山の地震の清正も入つてゐます。これも明治まで行はれてゐました。

遠州中山染

寛政九年九月、中座上演――中山大納言が江戸へ使者に立つた事件を、足利時代に准へて脚色した狂言です。

雪國嫁威谷

寛政十一年七月、中座上演――蓮如上人の一代記て、肉附き面の由來を脚色したものです。

花橙淀川語

寛政十二年一月、中座上演――並木正三の「三十石」を改作したもので、馬子の平太と、渡し守の源八の喧嘩てす。

傾城忍逢淵

享和元年一月、角座上演――石川五右衞門の改作て、淺尾爲十郎が勤めました。

濱砂傳石川

文化元年九月、中座上演――これも石川五右衞門の書き替へて、市川團藏が勤めました。

けいせい高砂松

文化四年一月、角座――女盜賊信夫、若松宿直之助、印南良助、なぞの出る狂言ですが、

鳥目の一角ても使つた、似せ手紙の間違ひが戀の媒介になる趣向は、この狂言が始まりてす。

この「けいせい高砂松」を絶筆として、文化六年九月三日、六十八歳て歿しました。

○

二世瀬川如皐は、寶暦六年の生れて、江戸の人てす。何年ごろ作者になつたのか、誰れの弟子になつたのか判然しませんが、最初の名が河竹文次といつたところから見ると、初代河竹新七の弟子てはなかつたかと思はれます、のちに御園文次とも改名しました。天明七年には中村仲藏と一しよに大阪へ上つて、角座へ出勤し京阪の作者の中へ割り込んで、作をしてゐるところを見ると、昇進は非常に早かつた人てす。

享和元年十一月には江戸へ歸り、中村座へ出勤して立作者となり、同時に二世瀬川如皐と改名しました。初世瀬川如皐は、三世瀬川菊之丞の兄て、最初は女形俳優だつたのが、後に作者となつたのですが、二世如皐と別に肉縁はなかつたのてす。たゞ文次の時分から三世菊之丞に引き立てられ、菊之丞附きの作者同樣になつて、共に上阪した緣故もあるので、瀬川如皐の名は菊之丞から貰つたのだと思はれます。

文化以後はズッと江戸にゐて、隨分澤山に狂言を書きました。いま確實に彼れの作と斷定の出來るものだけを列擧して見ませう。

花似想曾我

文化六年一月、中村座上演――吉例の曾我狂言で、三世歌右衞門の祐經に、初代高助の鬼王です。

八百屋お七物語

同年同月、同座上演――八百屋お七の百二十七回忌を當て込んだ狂言で、前髪左兵衞といふ惡黨で歌右衞門が當てました。

江戸春御摂曾我

文化七年一月、中村座上演――三世歌右衞門の鬼王が、鐘樓堂の立廻りで有名になつた曾我狂言です。その二番目に、お俊傳兵衞の書き替へを附けてあります。

敵討相合袴

文化七年五月、中村座上演――毛谷村六助と、宮本武勇傳を混じて作つた仇討ち物で、三

世歌右衞門の京極内匠の敵役を中心にし、「腹の子入れて十一人、殺しも殺したなァ」といふセリフは、後に幸四郎も此型で行つたほど、有名になつた芝居です。

これから文化十一年までは、福森久助と同座して、いつも同人と合作をしてゐましたから、此間の狂言は久助の傳を御參照願ひます。

大和名所千本櫻

文化十二年十一月、河原崎座上演――吉例の顔見世狂言で、千本櫻の世界です、女湯の場で、五世半四郎のいがみのお里が板の間稼ぎをするところが後にまで殘りました。

賜助御幣負

文化十三年三月、桐座上演――菅原の書き替へで、白太夫の娘小櫻が嫉妬の爲に殺され、後にこれが道成寺の所作事になる趣向でした。

これから二三年は、鶴屋南北、奈河一洗等と同座して、只助筆ばかりしてゐました。

何種龜顔觸

文政四年十一月、市村座上演――市村座再興の顔見世狂言で、小町黒主の世界を借り「關の扉」も入つてゐます。

御攝曾我閏正月

文政五年一月、市村座上演——本集收錄。

御贔負竹馬友達

文政五年十一月、市村座上演——七世團十郎と三世菊五郎が顔合せの顔見世狂言て、前太平記の世界てす。

還木曾菊族

文政六年十一月、中村座上演——木曾義仲の世界の顔見世狂言て、三世菊五郎の義仲、五世菊之丞の巴御前て當てた芝居てす。

御慶曾我扇

文政七年一月、中村座上演——曾我狂言へ、梅川忠兵衛の世話場を加へたものてす。

館風扇白浪

文政七年三月、中村座上演——石川五右衛門を前髪の若衆て行くといふ狂言て、石田の局の件も入つてゐます。

花曇艶街下駄傘

同年同月、同座上演——小女郎新兵衛と、古今彦惣とを混じた世話物てす。

江戸仕入團七縞

文政七年六月、中村座上演——夏祭を女てゆく趣向て、後の女團七の先驅をしてゐます。

音菊高麗戀

文政七年八月、中村座上演——天竺德兵衛、日本駄右衛門、唐土姬の三國盜賊の趣向へ、おさん茂兵衛の書き替へを添へた怪談狂言てす。

倭假名平家物語

文政七年十一月、市村座上演——顔見世狂言て、三世三津五郎の淸盛に、五世菊之丞の常磐御前てす。

皐富士曾我初夢

文政八年一月、市村座上演——曾我狂言に、黑船忠右衛門の世話場を添へたものてす。今も流行つてゐる「朝比奈釣狐」の所作事は、此時出來たのてす。

仕掛袖浮名替紋

文政八年三月、市村座所演――小いな半兵衞の世話物ですが、實は鶯助の作の三勝半七「褰頭霞彩幕」を增補したものです。

金峯山艶色源氏

文政十年十一月、中村座上演――千本櫻の世界の顔見世狂言で、女湯のお里も入つてゐます。

一陽來復澁谷兵

文政十三年十一月、河原崎座所演――盛遠亘の石段を中心にした顔見世狂言です。

晩年には作をしないで、たゞ名題だけを附ける役をしてゐたといひます。兎に角、南北よりも若くて、立作者になつた人ではありますが、すべての遣り方が地味で、あまり人氣はありませんでしたが、樂屋内では博識家として、尊敬されてゐました。得意であつたのは顔見世狂言でせう。顔見世狂言といふものは、滅多に再演はされぬものですが、彼れの作に限つては、明治前まで、普通の狂言の中に混じてまで上演されたものもあります。

天保四年十一月四日、七十七歳で沒しました。

渥美清太郎識

傾城春陽鶏

けいせいはるのとり

『傾城青陽鷄』は、辰岡萬作が五十三歳の時の作で、寛政六年の一月、即ち大坂でいふ二の替り狂言として、角の芝居へ書き卸した時代物であります。當時の二の替り狂言といへば、すべて此「傾城青陽鷄」のやうな物だと思へば間違ひはありません。つまり、背景に或る時代を取つて一人の俳優に三役位ゐづゝは必ず役が割れるほど複雑な筋を作り、どこまでも手廣くひろげて、最後の幕ですべての解決を附ける。――解決を附けるといつても、大抵謀叛人の見顯はしに限つたものです――『口明』（序幕のこと。發端ともいふ）には必ず阿呆な殿様と傾城が出る。「二つ目」「三つ目」、と筋を運ぶのは必ず金襖の御殿の場であり、一日の愁嘆場たる「世話場」（本編の田郎助内の場に當る）の前には必ず『小幕』といふ短かい幕がある（本編の馬切りの場に當る）次に道行き場があつて淨瑠璃を使ひ、大詰は全編の重なる役を揃へて、花やかな詰め寄せで打出し、といふ風に、内容も形式も殆んど一定してゐたものです。さうして、大阪狂言で後まで殘つたものといふと、多くはこの二の替り狂言であります。『傾城青陽鷄』は百二十八年前の作ではありますが、「馬切り」の場は現今でも盛んに上演を續けられてゐます。さうして「馬切り」の場は勿論、全編の上演も後年度々ありましたが、何分にも京阪の劇場に關する資料が乏しいので、年表は掲載することを見合せました。

江戸で「馬切り」の一幕を演じる時は、よく時代を足利に直し、信孝の役名も足利三七郎春孝と改めてやつたものです。

この狂言は、織田豐臣の時代を背景に取り、柴田の沒落を中心にしてありますが、併しお讀みになれば直ぐお氣附きになる通り、これは「宇都宮釣り天井」の傳說と、松平長七郎が「日本橋の馬切り」の事蹟とを交へて作つたものです。勿論、當時の政府は德川期の事蹟の脚色を許しませんでしたから、やむなく世界を違へて、其筋を通過させながら、所々で種々な暗示を與へて見物にそれと知らせてあります。

役から云つて、一番誰れも先きに氣の附くことは、三輪五郎左衞門が大久保彥左衞門であるといふ事です。馬術の事から「大坪々々」とうるさいほどに暗示してゐる上、「刀の鞘割り」「鶴の羹物」「牛の擧丸」と彥左衞門に關した傳說を澤山に加へてあります。その扮裝が、そつくり彥左衞門を見せてゐたことは、申すまでもありません。

「蔦の錦」云々は、大久保彥左衞門と近藤登之助の「五色の蔦」といふ傳說から思ひ附いた筋でせう。

柴田勝重は、本田上野之助を當て込んだものです。釣り天井も後には見せますが、その前に采女

と園菊の色模樣へ釣り夜着を使つて、それを暗示させてあるなどは巧みな手際であります。眞柴久吉は、井伊掃部頭に當るわけであります。

疳癖の强い松平長七郎を、三七信孝に當てはめたのは最も巧い手法です。與四郎といふ大工の口から釣り天井の秘密が洩れるのも傳說の通りですが、これを柴田の子にして大阪へ遁がす事にしたのは、流石に大阪の狂言らしい所です。

本集へ錄するに際し、底本として得た臺帳は、帝國大學附屬所藏の六册物の寫本一種きりでしたので、すべてを是れに據りました。

「コロタイプ版」に入れた「馬切り」の錦繪は、弘化二年三月、五世澤村宗十郎が江戸で演じた折のものであります。挿入した諸種の番附は、すべて書き卸し當時のものであります。

渥美淸太郎識

[illegible]

[illegible]

狂言作者

狂言作者

[illegible]

其時節の

二人連

綾 七巻

弐役 中村十蔵役 嵐雛助

弐役 可雛助役 嵐小六

千穐萬歳樂

傾城青陽鶏

發端　高麗國の場

登場人物　女官、白梅女。水仙女。林光女。鳥花女。金花女。蘭女。芙蓉女。高麗國守、館張喰。柳葉女。韃靼の使者、左將軍、孟湛。左軍蠻龍妹、王泉女。女官、桃花女。船頭、五郎藏。本名、宅間小平太。漁師、網作、本名、瀬川采女。照烈王妹、照菊皇女。高麗國、照烈大王。

造り物、向う一面の唐の堤。所々に水抜きあり。後ろ淺黄幕。舞臺先き浪板、打寄せし見得。右は高麗國濱邊の體。幕の內より、王泉女、蘭女、金花女、芙蓉女、柳葉女、桃花女、林光女、鳥花女、右八人、唐裝束、官女形りにて、皆々鋪置きの目籠に鎌持ち添へ、立つてゐる。合ひ方、唐樂入りにて幕明く。

蘭女　ナント、皆の衆。姬君、照菊皇女樣の仰せを受け、今日汐干の御遊覽。

金花　四方に蘭奢の風かをる

芙蓉　月に最中の、詠めに飽かぬ此お遊び。

王泉　かねて噂に聞き及ぶ、日の本第一の風景、津の國住吉の浦とやらいふ處には、彌生三日(みつか)に濱邊に出て、潮干となぞらへ、男女大勢入り集(つど)ひ、貝を拾うて酒宴を催す。

柳葉　其彌生三日(みつか)をかたどり、此濱邊に、姫御前(ごぜ)ばかりが打ちむれて、

王泉　われ〱までも、汐干のお遊びに連なりまするは

林光　お宮仕へいたしまする私しどもの身の仕合せ。

金花　日(ひ)の本(もと)の大内には、貝合せとやらまで、姫御前のもて遊び。

蘭女　それは大宮人(おほみやびと)、妹脊の固め、

鳥花　これは又、唐(から)の女の貝合せ。(ト是れより唄へ取つて)

〽見渡せば、汐のひがたに蛤の、貝取る小づま、しよぼ〱と、濡れて拾ひし數々の、其色貝は何々ぞ。(ト八人、舞臺先きへ出て、貝を拾ふこなし。合ひ方にて)

桃花　がふな、したゝみ、あさり貝、

柳葉　潮吹き上げのすだれ貝、

王泉　ちよつと見そめし姫貝に、

〽一筆(ひとふで)書いて送りたいらげ口明けて、ほや〱笑ふ赤貝に、心よせ貝、いたら貝。(トすこしいろへになり)

蘭女　君はすがひの粋なれど

〽われは、鮑の逢はぬ夜を、かこちてひとり片おもひ。(トいろへ)。

金花　及ばぬ戀ひも月に手を

〽さるほら貝のひつたりと、かはらぬ神の沖の石。(トいろへ)

芙蓉　朽ちても朽ちぬさゝえ貝、

〽梅の花貝さくら貝、寢もせでひとりあかにしの。(トいろへ)。

鳥花　戀ひを待てとのことの葉を、聞けば、ほた〱ほたて貝。

〽りん氣の角(つの)貝、露ほども。(トいろへ)、

柳葉　ふたりぬる夜の床ぶしに、

〽きぬ〴〵つゞるからす貝。(トいろへ)。

林光　身にしゞみ貝、しみ〴〵と。

〽おもひおし地の青貝に、ひかりをかざる珊瑚の玉、干珠満珠(かんしゆまんしゆ)に汐みちて

皆々　門出(かどんで)よしのほら貝は

〽悦びの貝、祝ひ貝と、皆々輿にぞ入りにけり。(ト皆々宜しく、いろへにて納まると、鳥

花女、橋懸りを見て)

「鳥花　アレ〳〵皆さん。ありやマア、何であらうぞいなア。

皆々　なんてござるぞいなう。

花鳥　はるか沖の方より來るは、僅かに船のやうなれど、唐土(もろこし)には見なれぬ船。

桃花　ドレ〳〵、あまの釣り船とも見えず、

林光　神代の昔、岩船ともいはふ船でもあるまいし。

柳葉　うつろ船とやらでもあるまいし、

蘭女　殊にをの子の只一人(ひとり)、

金花　此濱邊を目當てに

林光　わき目もふらず、

「皆々　來(く)るわ〳〵。

ト濱頭に成つて、縊がゝりより笘船に小平太、縞繻子の絆纒に紅しぼり、縮緬のゆがけ、花色繻子の脚絆にて、隨分綺麗に拵へて、手拭ひにて鉢卷きして艪を押して立て出で來る。

小平　アヽ、嬉しや。どうやら、斯うやら、此島へ漕ぎ寄せたが、こゝはマア何といふ島ぢやぞ。(ト言ひ〳〵船より上がり)なんでも對馬の沖から、滅多無性に押し切つたが、餘ッ程來たつもりぢや。マア、なんでも彼奴(きやつ)を騙して、こゝに置いて、われらは、ホイと。よし〳〵。さうとは知らず、テモマアよう寢てをる。コリヤ、網作々々。(ト船をたゝく)。

粂女　オヽ、何ぢやい〳〵。

小平　何ぢやどころぢやない。マア、起きて來い〳〵。

粂女　何を其やうに、けたゝましう起す事があるぞい。

ト笘押しのけて粂女、緋縮緬の上に、練りの絞りの單衣物を着て、淺黄繻子の手負ひ、脚絆、腰蓑にて、練りの手拭ひを鉢卷きにして、船より出かけて

小平　イヤ、起さにやならぬ。マア、何であらうと、爰へ來い〳〵。折角面白う見てゐる夢を覺まさせをつた。わるい者ではあるぞ。

采女　ドレ〳〵、何を其やうにやかましう言ふ事ぢや。（ト言ひ〳〵船より上がる）。

小平　イヤ、やかましう言はねばならぬ。コレ、わりやアこゝを知つてゐるか。

采女　何を言ふぞい。あんまり漁はきかず、好物の酒は飲み過ぎる。前後も知らず寢てゐるおれに、こゝをどこぢやとは何の事ぢや。

小平　さればいヤイ。なんぼ起しても、おのれは性根は付かず。とかうするうち、どうやら風は吹いてくる、浪は高し、コリヤ、なんでも押してくれうと、めつた無性に艪を押すと、風は追ひ手になつて帆は上げねども船は飛ぶ、こりやうまいあんばいぢやと、精一杯に押し切つて、漕ぎ寄せた處が爰ぢや。つひぞ、おりやこんな處へ來た事がない。爰はマア、何といふ處ぢや知らぬ。

采女　待て〳〵。此濱邊の樣子といひ、こちらの堤のあんばいから、あの山の險岨な處、こちらの森の木といひ、つひぞ見た事もない樣子では、こりや唐ぢやわいヤイ。

小平　ヤア〳〵〳〵。

采女　テモサテモ、滅相な事をしたわいイ。

小平　こちの濱邊へ附けうと思うて、めつた無性に押したが、唐へ來たとは、思ひがけない。

采女　何を云ふやら。風が吹いたらおれを起すとよいのに。

小平　何を云ふぞい。なんぼ起しても根つから起きぬもの。よい〳〵、こんな所へ來たも、おのれがあんまり寢るによつてぢや、其返報に、われを爰に置いて、おりや去ぬるわい。

ト船へ乘らうとする小平太を引き附け

采女　イヤ、おのれは途方もない事を云ふぞよ。なんぢや。おれを爰に置いて、わればかり去なうと云ふか。コリヤ、元來おれは漁師、われは楫子なりや、おれが下知を受けて船を押さにやならぬ。すりや、マア、おつとつておれは主のやうな者、われは家來のやうな者ぢやぞよ。其家來が主を捨てゝ去なうとは、野太い奴の。われを爰に置いておれがいぬる。さう思うてゐをらう。

ト船へ乘らうとする。小平太、采女を引きのけて

小平　何ぢや、おれを家來ぢや。イヤ。野太い奴の。コリヤ、ヤイ。同じ所に住んでゐる漁師なり、船頭なり、高い低いの隔てはないわ。じたい常々おのれが邪魔になるわい。

采女　なんでおれが邪魔になる。

小平　コリヤ、云ふな。惣體對馬の浦々に住む花娘、おのれがいたしめて廻りをるに依つて、つひぞおれがせしめた事がないわい。いかに漁師なればとて、さう磯せゝりせられてはならぬ。おのれを爰に捨てゝいぬるは、浦の若い者の爲ぢや。さう思うてけつかれ。（ト行かうとするを引き戻して）

采女　さう聞いたら猶去なにやならぬ。爰にゐてよくば、おのれひとり残つてゐよ。（ト行かうとするを捕まへ）

小平　イヽヤ、われを去なす事はならぬ。

采女　おのれがならぬといふたとて、爰にゐようかい。（ト振り離す）

小平　イヽヤ、われは去なさぬ。おれが去ぬる。

采女　おのれより、おれが先きへ此船に乗つて

小平　イヽヤ、ならぬ〳〵〳〵。

采女　エヽヽ面倒な。（ト突き退ける。采女、船へ乗らうとするを小平太、引きかけ、又乗らうとする事二三度。此内右の人數。木陰より出て）

八人　コレ、そなた衆は何者ぢや。（ト皆々ずつと向うへ出る。兩人、此聲に恟りし、皆々を見て）

小平　ヤア、唐裝束を着て

采女　女ばかり大勢寄り集つてゐるわ。

小平　そんなら爰は

八人　女護の島ぢやわいヤイ。

小平　ヤ、、、、。

八人　イヽヤ、爰は新羅百濟高麗國と云うて、三韓の入り口ぢやわいの。

小平　エヽ、そんなら爰は

女皆々　釜山海の大湊ぢやわいなう。

采女　それ見よ。何のめつた無性に艪を押さいでもよいことを。

小平　ぢやというて、おれも、よもや唐へ來ようとは思はなんだ。

采女　もうせり合ひを止めて、日本へ去なうぢやないか。

小平　イカサマ、唐で船頭もなるまい。そんなら、網作。

采女　五郎藏、おぢや。（ト兩人船へ乘らうとするを、右八人、兩方へ四人づゝ分れ、兩人を取り卷いて、

皆々　イヽヤ、去なす事はならぬぞ。

采女　なんぢや、去なす事はならぬ。

皆々　姫君樣の御上意。

兩人　エヽ。

ト恟りする。ト樂太鼓打ちかける。是れより管絃になり、小平太、采女、是れを聞いて、ウロウロする

と、臆病口より、照菊皇女、唐裝束にて、天冠、唐土姫の拵へ、唐團扇、唐沓穿き、しづ〳〵出る。兩方より、白梅女、水仙女、唐裝束にて、柄の長き唐の團扇を兩方より照菊皇女が頭に付け出る。官女、皆々平伏する。小平太、采女、照菊皇女を見て、驚き、共に狽狽へ、辭儀する。此内靜かなる唐樂にて、照菊皇女上の方に立つて

照菊　皆の者。

皆々　ハヽア。

照菊　日の本より思はず知らず、流れ寄りし浦人は、あの兩人か。

皆々　左樣でござりまする。

照菊　珍らしい和國の男子、對面しませう。

皆々　ソレ、顏を上げさつしやれ。

小平　ハイ。（小平太、顏を上げ、照菊皇女の顏を見て「テモ、よい器量ぢや」と云ふこなしあつて、見惚れ、じろじろと照菊が傍へにじり寄る。照菊皇女、氣味わるくなり、唐團扇にて顏を隱す）。

皆々　下がりや〳〵〳〵。（ト口々に言ふ。小平太、呟き、元の所へ下がる）。

鳥花　コレ、こちらの男の子。

皆々　顏をあげや。

采女　ハイ。（ト采女、顏を上げる。照菊皇女。見て「テモ、よい男ぢや」といふこなしにて、見惚れる思ひ入れ。采女も、照菊皇女を見て、こなしあつて、小平太、此體を見て、ムッとする體にて、采女を押し退け、先きへ出て、照菊皇女に顏を見せるおこし。照菊皇女、これを見て、うるさがり、唐團扇にて顏を隱す采女腹立ち、小平太を引きのけ、向うへ出て、下にゐて、照菊皇女が顏を見る。照菊皇女嬉しきこなしにて、又見惚れる思ひ入れ。此樣樣宜しくあつて、トヾ小平太、腹立て）

小平　エヽ、置きやァがれ、忌々しい。おんなじ男をなんぢややら、依估贔屓な顏の見やう。よい〳〵こんな所に、いつまでまだら〳〵としてゐる事はない。去んで吳れう。サァ、綱作、われも立て〳〵。（ト引き立てるを、振り放し）

采女　イヤ、去にたか、われ一人去ね。おりやもう爰にゐるわい。

小平　イヽヤ、われ一人爰に置く事はならぬ。サァ、來い〳〵。

采女　ハテ、妙な事を言ふわいの。自體われが、おれを酒に醉はして寢さして置いて、どこへなと捨ていぬる積りぢやなかつたかい。

小平　オヽ。そりや、われに浦々口の娘子供が、惚れくさるが、げんがわるいに依つて、それでいつそ

女護の島へなりと捨て、こまさうと思うて、おのれを酒に醉はして、寢てゐる内に、追手が吹いたを幸ひ、めつた無性に漕いて來たのぢや。

采女　サア、それぢやに依つて、おれが爰にゐるは、おれが勝手ぢやに、おれを捨てゝ、われ一人日本へ去ねく。

小平　イヽヤ、去なぬく。われ一人おいたら、どんな旨い目をしをらうも知れぬに依つて、爰におく事はならぬ。サア、一しよに戻れく。

采女　イヽヤ、去なぬく。

小平　おのれが去なぬと云うて、意地張らして置かうかい。（ト無理に引ッ立てようとする）。

照菊　ソレ、留めてたもいなう。

金花　姫君樣の御諚ぢやぞ。

皆々　マアく、待ちやいなう。（ト八人して小平太に取り付き、とめる）。

小平　イヽヤ、放さつしやれ。（トもがく）。

島花　マアく、よいわいなう。（ト皆々小平太を抱きとむ）。

王泉　コレ、あの人には姫君樣の御用が有るわいなう。

金花　又そなたには、わしらが何なりと賴みを聞かうわいなう。そなたも又望みがあるなら、何なりと云うて見やいなう。

蘭女　どんな事でも聞いて遣るわいなう。

芙蓉　其樣に腹を立てずと、

皆々　マア、心を鎭めやいなう。

小平　ムウ、そんなおれが云ふ事を、何でも聞いて下さんすか。（ト王泉女、芙蓉女、金花女、蘭女に焦

王泉
金花　聞くわいなう。

島花水仙
桃花柳葉　こちらも聞くわいなう。

小平　よごんす。コリヤ、われはあのお姫樣の側へ行て、御用を聞け。エヽ、おのれはきつい仕合せ者ではあぞ。

采女　テモ、サテモ、おれが顏が何ぞの用にあふべいな奴ではあるぞ。（ト云ひく、照菊皇女が側へ行き、互ひに顏を見合せ）私しに御用とは、何でござりまする。

照菊　そもじに頼みたい、みづからが願ひと云ふは（ト云はうとして、恥かしきこなしあって）様子を語るもおもてぶせ。ナウ、皆の者。

皆々　イヤ、其様子は、私しどもが申しませう。（ト八人見得よく坐り）

「鳥花　これにましますは、高麗國の帝、照烈大王様のお妹君、照菊皇女と申しまするお姫様。

玉泉　いまだ定まる殿御もなく、殊に容顔美はしき御事は、四百餘州に隠れなく

花桃　取りわけ縁組は大國にて、さま／″＼の貢ぎ物送り、姫君様を所望あれども、何分姫君様の御承引遊されず、

柳葉　殿御選みと云ひふらせども、さら／＼いたづらなお心にはあらず。

蘭女　過ぎ去り給ふ母御様の後世の爲と、御かざりはおろし給はねども、心はすゞしき法のいとなみ。

玉泉　御寝殿に閉ぢこもり、御經讀誦なされしところ、此頃不思議の夢の告げ。

金花　母御様の御面影、姫君様の御枕にたゝずみ給ひ、これ迄いづれへの入内も承知なきは母への孝心其誠を感じ、三世の佛神に母御様の願ひを言ひ給ひ、

玉泉　お望みの神のお恵みにて、和國より授け給ふ縁結び、此濱邊に出て、焦れよる船を待てよ、とある夢の告げ。

蘭女　それゆゑ今日の汐干のお催しも、誠は殿御を待つ貝合せ。

芙蓉　正直の頭に宿る神風も、忽ち姫君様の戀ひ風になつて

鳥花　思ふ湊へこがれ寄つたあの船は、二世の御縁を繋ぐ纜。

玉泉　帆を十分に乗り込んだよい殿御。

桃花　是れから御寝所へお供申して、おもかぢ、とりかぢ御睦言。

柳葉　唐と日本を冥土から、母御様の、お仲人は。

玉泉　三國一の花聟様。さぞ姫君様

「皆々　お嬉しうござりませうなア。

照菊　推量してたもいなう。（ト様子を聞いて、采女、小平太、恟りして）

采女　そんなら、わしをあなたの

皆々　殿御にするわいなう。

采女　エヽ。

小平　イヤ、おのれ、どえらい事を仕出したな。よいわ。かうなるからは、おれも乗りかゝつた船ぢや。ともどもにお世話をやいて、唐の聟にして遣らうが、滿更おれもすても孫みてにどうもならぬ。コ

レ貴様達、たつた今、何なと望みを聞いて遣らうと云うたが、おれが望む物をくれるなら、お姫様の望みを叶へて遣らう。又おれが望みを聞いてくれにや、彼奴も爰に置かぬ。日本へ連れて去ぬる。否か、應かの一口商ひ、返事を聞きたい。どうぢや。

皆々　して、そなたの望みは。

小平　あたひが欲しい。

皆々　あたひとはや。

小平　ハテ、あたひとは、先づ唐に澤山な珊瑚樹を一萬本。

皆々　それが欲しいかや。

小平　上てりの鼈甲が十萬枚。

指々　こゝろ安いことぢやわいの。

小平　大人參を萬斤。

皆々　合點ぢやわいなう。

小平　白砂糖を富士の山ほど。

皆々　遣るわいなう。

小平　鳳凰を二千羽。仙人の生擒り。

皆々　よし〳〵。

小平　象の蒲燒き。

皆々　ヤア。

小平　虎の天麩羅。

皆々　ヤア。

小平　猩々のこけらずし。

皆々　ヤア。

小平　何でもかでも、おれが望む物を下んすなら、料簡するわいなう。

皆々　頼むわいなう。

小平　ようごんす。呑み込んだ〳〵。

采女　テモ、サテモ、慾な奴ではあるわい。時に、わたくしは、とんと合點の行かぬことがござります
る。

照菊　何がいなう。

栄女 ソレ〳〵、さう仰有る詞付きなら、物ごしなら、附き〴〵の女中まで、皆日本詞。チンプンカンプンは少しもない。こりや、どうした事でござりまする。

照菊 成る程。それには深い樣子のある事。今日よりは自らが殿御と定まるそなた。包み隱さうやうはない。何を隱さう自からが母上は、大日本肥前國、長崎丸山にて、蔦山といひし浮かれ女。この高麗の臣下、雲南公林官といふ人になれ馴染み、情けの胤を身に宿し、産み落されしはみづから。其折柄、林官樣には、お國へお歸りなさらねばならず、母樣は別れを惜しみ、わが蔦山と云ふ名によそへ、かねて蔦山の照り蔦を取り寄せ、御秘藏ありし一本を林官樣に送り、歸國の後、此國に植ゑ置き給ひしに、日本の蔦唐土の土地に生ひ茂り、五色に色どる花かづら。林官樣にも程なう御病氣にて、終に此世を去り給ふ。母樣は林官樣を戀ひ焦れ、つひに子の自からを抱き、此國へ尋ね來て、御最期の樣子を聞き、心もそゞろの亂れ髮、誰れ取上ぐる人もなく、狂ひさまよひ給ふを、先帝剛照王樣、宮中へ母樣を召され、女官となし、勿體なや、妾は照烈王樣の妹照菊女と呼び、御慈しみの有り難さ。程なく父帝樣にも崩御遊ばし、母上樣も御臨終。最期の際に自らを呼び、父帝樣の御恩を、必らず〳〵忘るゝな。母は今死ぬるとも、魂ひは其方の蔭身に添うて守らん。とりわけ、あの庭前の蔦は日本の蔦、母が名も蔦山と呼ぶ緣に寄り、母が形見と思へと、

くれ〴〵との御遺言のそのお詞。薨かり給ふ其年より、いよ〳〵榮ゆる五色の蔦。殊にこれこそ母樣の形見ぞと思へば、蔦がなほ大切、身にも命にも替へての秘藏。又自からを初め皆の者が詞附き、見なれ聞き馴れ何時となう、唐の詞は何處へやら、和詞に言ひ習ひし、樣子はだん〳〵此通りでござりまするわいなア。

栄女 ハテ、サテ、思ひも寄らぬこなたのお身の上。ムウ、すりや、高麗國の重寶、蔦の錦と云ふは、その五色の蔦のことでござりまするか。

照菊 イヽエ、その蔦の錦と申しまするは、高麗國第一の寶。父帝樣より、兄君照烈王樣のお手にあるとは聞きながら、自からも何のやうな品やら、目に觸れませぬわいな。

栄女 ムウ。すりや蔦の錦と云ふは、いよ〳〵照烈王の所持とな。

照菊 アイ。

ト栄女、小平太、ちよつと顏見合せ

兩人 ハテ、ナア。（ト兩人こなし）。

芙蓉 サア、かう姫君樣のお身の上を打明けて、仰しやるからは、もう否應は言はしませぬぞえ。

鶴女 日本へ去なうと言はしやんしても、去なす事は成りませぬ。

白梅　今宵は目出度う、蔦の殿にて御祝言。
水仙　日本の殿御の肌にほだされて、かならずおやつれ遊ばすなえ。
柳葉　モシ、日本人は、女子をきつう欺すげにござりまするぞえ。
公花　かならず閨の睦言に、しまけぬやうに遊ばせや。
白梅　ほんに、見れば見る程よい殿御。
玉泉　あんな殿御に抱かれて寢たら、
鳥花　それこそほんまに日本國が、一しよに寄るてあらうぞいなア。
皆々　ヲヽ、をかし。（ト皆々笑ふ）。
照菊　オヽ、コレ〳〵、まだ兄上樣にお願ひ申さぬ緣むすび、殊に韃靼國へ自からを、入内せよとお勸
め遊ばす折なれば、ひよつと此こと洩れ聞えては、其爲
玉泉　成る程、わたしが父上、蟠龍殿へ、密かに語り、首尾よう事を計ひませう。
照菊　萬事は其方親子を頼みまするぞや。
采女　そんなら密かに忍び逢ふと思ふには。
玉泉　「コレ、モシ、此堤を傳ひ、遙かに行けば入り海あり。

金花　其水筋の流れに沿うて、行く先きは、
芙蓉　姫君樣の御寢所、蔦の殿。
蘭女　水門にはわたし共が出迎ふ。
「皆々　首尾よう逢はせますわいなア。
采女　そんなら跡より。
菊照　必らず待つてをりますぞえ。
采女　不思議の緣で唐と日本の契りとは。
照菊　これも母樣の御惠み。
采女　蔦に結ぶの緣定め、
照菊　必らず心の夢を覺まさぬやうに。
采女　いつ迄も心は正夢。
照菊　アノ、眞實
采女　まことに。
照菊　エヽ、嬉しうござりまする。（と兩人抱く）。

小平　こりや、たまらぬ。(ト、玉泉を抱く)。
玉泉　アヽ、コレ。
小平　そんなら、いつそどれなと。
ト蘭女に掛るを、嫌(いや)がり、突き退ける。又金花女に抱き付くを。突き飛ばす。小平太、それより皆々を追ひ廻す。此のうち始終唐樂にて、此時、臆病口より、高麗國棘守館張喰、ぴんとこなの唐裝束、唐冠りにて、下官四人程、折檻 杖を持たせ、出て來るを、小平太、取り違へ、張喰に抱き付くを、張 喰驚き
張喰　キコライ〳〵、ウンクワンタサツ。
ト兩人揉み合ひ、小平太を突き飛ばす。
下官四人　フナン〳〵。(ト折檻杖を振り上げろ)。
小平　此奴(こいつ)ら。こりやなんぢや。
張喰　キコラ〳〵、ウンクワンタサツ。(ト下知する)。
下官皆々　フナン〳〵。
ト折檻杖にて小平太、采女を叩き立てる。兩人驚き、あちこちと逃げ廻り、トゞ船の内へ逃げ込み、隱れる。

張喰　日本人はケツタカ〳〵。
皆々　チリテン〳〵。
ト此内、照菊皇女、皆々心遣ひのこなし。張喰、照菊皇女に向ひ
張喰　照菊皇女に申し上げまする。兄君の仰せに依つて棘子館張喰。お迎ひの爲、參上。イザ、宮中へ御歸館あられませう。女官達、供奉(ぐぶ)致されよ。
照菊　イヤ、自からは今暫く。
張喰　ハテサテ、兄君のお召してござるが。
照菊　それでも。
張喰　御入來々々々。(ト無理に追ひ立てる)。
下官　ハヨウ〳〵。
ト下官共、女官を追ひ立てる。右唐樂にて張喰、皆々、照菊其他を追ひ立て、憶病口へ入る。唐樂にて船の内より、采女、小平太、窺ひ出て、邊りを見廻し、互ひに顏を見合せ、
小平　瀬川采女殿。

采女　宅間小平太殿。

小平　まんまと首尾よう。

采女　コレ。

ト押へ、此時唐樂止めて、唐の合ひ方に成り、兩人こなしあつて

主君信長公、茶園を好ませ給ふに付き、高麗國の重寶、蔦の錦を茶器の袋に遊ばされんと、先達て御所望なされし所、有無の返答もなく打捨て置きしは、高麗國照烈王、小田家の武威を輕ろしむる所業。我が君甚だお怒りあつて、再び高麗國へ使者を差越さるべき處、思ひはからず光秀が、反逆にて御落命ありし故、其沙汰も等閑に打捨てありしが、此度、小田家相續に依つて、眞柴久吉殿の下知に任せ、此采女に仰せ付けられ、高麗國へ密かに渡り、蔦の錦を首尾よく請け取り立ち歸れとの御意を受けて、此土に渡る。

小平　まつた此小平太も、三七郎殿の御意を受け、蔦の錦請け取り歸る横目役を承り、貴殿と申し合せし如く、浦人の吹き流されし體にもてなし、思はずも照烈王の妹姫に近寄りしは、此方の手段。

采女　成る程、戀ひから取入り、蔦の錦奪ひ取つて立歸るは、案の內。

小平　姫の寢所は向うの入り海。流れに沿うて

采女　五色の蔦の生ひ茂げる別殿。

小平　一刻も早く忍び入つて

采女　蔦の錦を奪ひ取らば。

小平　貴殿の手柄。拙者とても、横目役の大慶。

采女　然らば、小平太どの。

小平　采女どの、ござれ。（ト兩人こなしあつて、臆病口へ走り入る）。

右の堤一面に引いて取る。前の打寄せ浪板せり下げる。件の苫船、橋懸りへ引き取る。向うの淺黄幕切り落すと、唐樂は止み、造り物、三間の間朱塗りの柱、欄干唐の彫り物。向う無地金の襖、緣先きに朱塗りの高欄。臆病口、橋懸り、兩方とも長廊下、いづれも柱、高欄、皆朱塗りにて、兩方の廊下の屋根より一面に五色の照り蔦、枝垂れ掛り、右は照菊女寢所の蔦殿の見得。此二重舞臺に、照烈王。唐裝束唐冠りにて、劔を抜き持ち、照菊女を切らうとしてゐる。上の方廊下に、孟堪、ぴんとこなの唐裝束、唐冠りにて床几に凭りゐる。下の方の廊下に張啗、坐りゐる。女官。皆々、照菊女を庇ひ、また照烈王を留めてゐる。此體にて唐樂早め、バタ〱にて、一面に向うへ突き出す。

女官皆々　マァ〳〵、お待ちなされませ、

照烈　にッくい妹。韃靼國と緣邊の取結び、承引せずは只一打ち。汝が首を渡さねば、使者に來つた右將軍孟堪へ、朕が詞は立たぬわいヤイ。

孟堪　イカサマ、左樣なされずば、照烈大王のお詞は相立ちませぬ。わが國の韃靼王、此國とちなみを結ばん爲、妹君照菊女を娶らんと、數々の送り物。今となつて提げて歸られうか。たつて御承引なくば、痛はしながら、妹君の御首を持ち歸るか。但し、御承知あつてお輿入れあらるゝか。さなきに於ては韃靼、高麗、兩國の確執。軍勢を以て、國諸共に切つて取らうか。二つ一つの御返答、右將軍孟堪、ぢきに〳〵承はらうか。

張嗆　あれ、お聞きなされたか、姫君。御方樣の御返答が、高麗國の治亂の境でござる。サア、早く、御承知の御返答遊ばされ、然るべう存じまする。

照菊　イヽヤ、どの樣に勸めても、みづからは、唐土人と妹脊の語らひは、赦して下され。モシ、兄上樣、達つて韃靼國へお詞が立ちませずば、みづからが命を召し、國の騷ぎを、お鎭めなされて下さりませいナア。

照烈　ヤア、出過ぎたる女め。其方が首打ち、韃靼王のお憤りは、いと易き事ながら（元ノマヽ）胤腹

一つならぬ其方なれども、幼少よりわが妹となしたる其方、不便に思ふわが心底を、むそくになし、唐土人に緣を組むまじなどゝ、過ぎ行きし母は、長崎の浮れ女、其性根を受け繼ぎしいたづら女郎め。不便さ餘つて憎さが百倍、今首落し、韃靼國へ送り遣はす。觀念せよ。

ト劍振り上げ、照菊女が方へ行かうとするを、女官、皆々照烈王に取附く。

女官皆々　マァ〳〵、お待ちなされませ。

照烈　ヤア、面倒な女ばら、其處退け。

ト女官を皆々二重舞臺より蹴落す。張嗆、「女官を引きのけて、寄せつけぬ見得。照烈、照菊女を引き寄せて

照烈　今こそ觀念。

ト劍を振り上げる。トどろ〳〵にて、軒に枝垂りし五色の蔦、照烈王が振り上げし劍をから捲き、留める見得。孟堪、張嗆、此體を見て、悔りのこなし。照烈王。振り仰のき、蔦を見る。照烈、キッとこなしあつて

照烈　「ハテ、怪しやなァ。妹が命を絕たんと振り上げし劍を搦まき留めしは、さては彼れが母、最期の節、形見と遺言せし五色の蔦、母の魂魄乘り移り、わが子の命を助けんとなすは、ハテ、訝かしや

なア。

照菊　それ程までにみづからを、思ひ給はり下されまするか。母様(かゝさま)、エヽ、有り難うござりまする。

照烈　ヤア、奇ッ怪なる母の亡靈。わが娘許りを傍はり、大恩を受けたる國の騒ぎを顧り見ぬ草木、見るも中々汚らはしい。ヤア、張喰、蔦を殘らず切り拂ひ、根を斷つて葉を枯らせ。早く〳〵。

張喰　ハア。畏まつてござります。

ト張喰、劔を拔いて蔦の根を切り拂はんとする。照菊驚き、張喰に取り付き、留めて

照菊　コレ、待つてたも。我が子を憐れむ母様のお志しは、千筋にからむ蔦のかづら、切り捨てうとは胴慾な。蔦の替りに自らを、ズタ〳〵に切つてなりとも、どうぞ蔦を切る事は赦してたもひなう。

照烈　ヤア、幾度云うても同じ事。張喰、早く蔦を切り崩せ。

張喰　ハツ。サア、韃靼國へ入内めさるゝか。

照菊　サア、それは。

孟堪　返答延引せば、大軍を以て押し寄せうか。

照菊　サア、それは。

照烈　早く蔦を切りくづせ。

照菊　サア、

張喰　入内さつしやるか。

照菊　サア、

孟堪　押し寄せうか。

照菊　サア。

照烈　蔦を切らうか。

照菊　サア、

三人　サア、

皆々　サア〳〵〳〵、

三人　なんと。

照菊　ハアヽ。

張喰　エヽ、面倒な。

ト照菊を引廻して蔦の方へ行かうとする。照菊、キッと留めて

照菊　アヽ、コレ待つてたも。成る程、入内をしませうわいのウ。

孟堪　韃靼王へ、

照烈　入内致すか。

菊照　アイ、参りませう。

玉泉　そんなら姫君樣、

女皆々　御眞實、入内をば、

照菊　どうも母樣のお形見、何と蔦が切らされうぞいなう。

女官皆々　それでは先刻の

照菊　アヽ、コレ、何事も自らが心にある。マア、默つてゐやいなう。

照烈　妹、承引の上は、一時も早く入内の用意。皆の者、妹を奥殿へ伴なへ。

女官皆々　そんなら、どうあつても。

照菊　ハテ、何にも云はずと、皆、奥へおぢや。

皆々　先づお入りなされませう。

ト唐樂にて、照菊、こなしあつて奥へ入る。後より女官皆々附いて入る。後にて、三人こなしあつて、孟堪、下座へ下がり

孟堪　姫君、御承引ある上は、かねて照烈王のお頼みの通り、スハと云はば、韃靼國は皆高麗のお身方其段御安心下されませう。

照烈　われ、かねて日本を切り從へんと、忍び〳〵に合體の武士を語らひ、折を窺ふ處に、武威盛んなる小田信長、明智光秀の爲に滅ぼされ、又光秀も眞柴久吉討伐す。さるに依つて小田の一類、平の三七郎信孝、同舍弟、小田三郎信雄。又幼少の三法師丸、此三人の內、何れか四海を治めるとも、未だ定まらぬ織田の天下。此處に乘じて、韃靼國の大軍を引き連れ、日本へ攻め上らんわが大望。

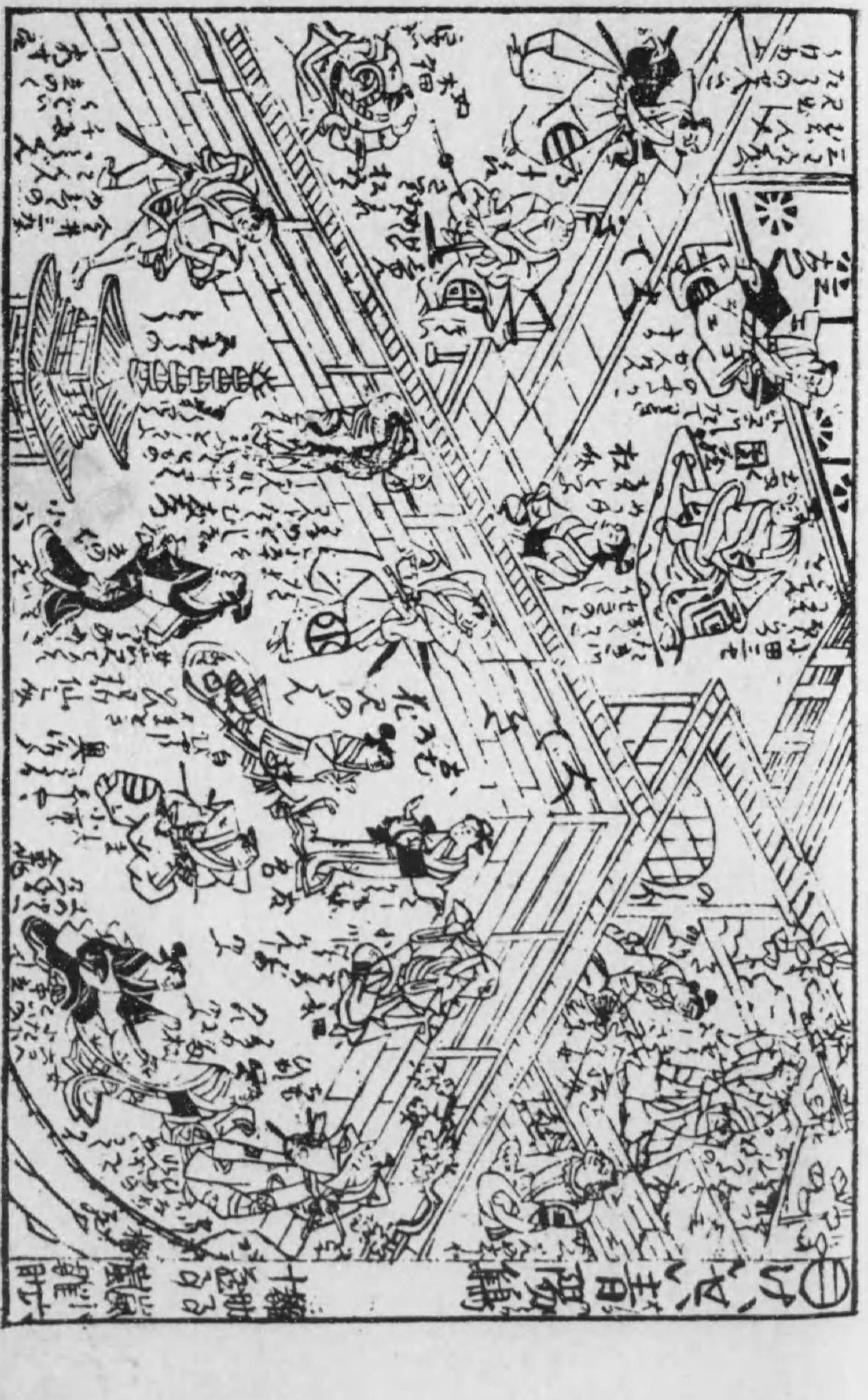
張噲　又其上に、小田家に遺恨を含む者、其數を知らず。さるに依つて此張噲、日本へ通路を求め、先達てより、小田家に仇ある者共と合體仕懸け、照烈大王へ御身方、致させ置きましてござります。

孟堪　ホヽウ、天晴れ〳〵。姫君御承引の上は、主君韃靼王の悅び。使に立つたは孟堪が面目。某は急ぎ歸國仕り、輿入れの儀を言上せん。

照烈　急いで歸國致されよ。契約の如く妹を送らば、いよ〳〵わが身方となつて、高麗の加勢さるゝよナ。

孟堪　御意に及ばぬ。然し違變あつて妹君を、送り越されずば、韃靼、高麗、因みは敵身方。

照烈　言ふにや及ぶ。其時は、大軍を以て押寄せ召されい。



孟堪　妹君のお輿入れが善悪の境ひ。

張喒　一刻も早く、姫君をお輿入れ。

孟堪　然らば某は本國へ。

照烈　使者、大儀であつた。

孟堪　ハツ。

ト唐樂にて、孟堪、橋掛りへ入る。照烈王、張喒奥へ入る。橋懸り廊下の方より、采女、窺ひ出て、あたりを見廻はし、こなしあつて

采女　正しく高麗の照烈王、韃靼の大軍を語らひ、日本へ攻め登らんと、妹を韃靼王へ送り、因みを結ぶ謀りごと、今の如く得心の體なれば、韃靼王へ身方に付くは治定。そんならその姫は韃靼國へ嫁入りする心か。エヽ、こりヤ、腹が立つて來たわい。ヤイ何ぢやゝら、さつきに濱邊で見るとどうやら心のあるやうな素振りに見せかけて、ちやんと内證で嫁入りの相談。ほんにモウ、唐の娘も油斷がならぬ。おのれ奥へふん込んで、よう一ぱん騙したなアと云はうか。イヤ〳〵姫の心底は、韃靼へ行く氣はなけれども、嫁入りせねば高麗と韃靼、確執となつて、攻め寄せるといふに依つて、是非なう行きませうと云うた心か。アヽ、思へば可愛い事でもある。取り分け不思議な

は此蔦。如何さま日本に見馴れぬ五色の蔦、最前の奇妙と云ひ、夢の告げに日本の男と縁を結ぶとあるからは、矢ッ張り采女とあの照菊女と、夫婦の縁を結んだのか。それなれば韃靼へは遣られぬ。いつそ日本へ連れて去んで、さうぢや。（ト奥へ行かうとして）イヤ〳〵、色は諸道の妨げ。大切な御用を承り、入り込んだ此采女。わが身の戀ひに大事を忘るゝは不忠不義。殊に今聞けば、小田家に仇ある者ども、高麗へ合體いたさせ置いたとは、聞き捨てられぬ一大事。立ち歸つて此樣子、注進せうか。さは云へ、蔦の錦を持ち歸らねば、高麗國へ入り込みし證據なし。ハヽ、何としたものであらうナア、

ト手を組み、思案の體。此時小平太、橋懸りより出で

小平　イヽヤ、そりや思案に及ばぬ。

采女　ヤア、小平太どの。すりや、最前からの樣子を

小平　殘らず承つた。采女どの、高麗、韃靼、合體の樣子に、日本の膝元に正しく小田家に仇を含む者ありとの事、聞き捨てになりますまい。貴殿は一時も早く歸朝致し、右の趣き、注進あれ。

采女　イヤ、彼の蔦の錦の實否を糺し、持ち歸るが拙者の役目。其一品を取り得ぬ内に、めつたに歸國はなりますまい。

小平　さればさ、其蔦の錦を取り得んと、數日高麗に滯留の內、韃靼、高麗一つに成り、日本へ攻め上らば、其時貴殿は何と召さる。

采女　ヤ。

小平　サア、其事を思うて拙者が工夫。

采女　シテ、其工夫とは。

小平　さればサ、高麗國の重寶蔦の錦とは、いへども、いまだ日本へ渡らねば、誰れあつて見た者がない。サア、爰が工夫。アレ、あの五色の照り蔦を持ち歸つて、是れこそ高麗國の重寶、蔦の錦なりと、一旦貴殿の役目を納め、其上にて、三輪、柴田、眞柴の三老に、彼の韃靼、高麗、合體の様子、殊には小田家を滅亡させんと工む日本の反逆人、云はゞ唐と日本に大敵、三軍安からぬ一大事。去るに依つて貴殿に五色の蔦を持參させ、拙者が跡に殘つて、誠の蔦の錦を詮議仕り、立ち歸りませう。ナント、此工夫は如何でござるな。

采女　御尤も。イカサマ、貴殿と拙者、錦の詮議に日を送り、若し唐土勢、日本へ攻め入らば、われ〳〵が役目は

小平　そこであの五色の蔦を、錦と僞り持ち歸り、

采女　高麗、韃靼、合體の樣子。

小平　小田家に仇を含む逆賊、

采女　御注進申すが四海の爲。

小平　然らば蔦を。

ト軒に枝垂れある蔦を一ふき取つて釆女に渡

采女　さやうならば、拙者はお先きへ。

小平　釜山浦の湊に、乘り捨たる小舟を幸ひ、

采女　歸朝して何かを言上。

小平　必ず萬事拔からぬやう。

采女　然らば和國で、

小平　一刻も早く。

采女　心得ました。

ト蔦を持ち、逸散に向うへ走り入る。此うち始終唐樂にて、小平太、跡を見送り

小平　まんまと彼奴を先きへ返し。よし〳〵。

ト云ふうち臆病口より照烈王、出る。

照烈　日本より忍びの使ひ、宅間小平太。

小平　照烈大王。

照烈　高麗、韃靼の樣子、今の若者に注進させし其方が心底は。

小平　蔦の錦と僞りて、此照り蔦を彼奴に持たせ、先きへ歸したは深い計略。似せ物を以て誑かる瀨川采女と、彼奴を科に落し、跡へ拙者が歸朝仕り、高麗、韃靼、合體は、跡方もない雜說なりと、誠らしく言ひほぐし、采女一人を罪に沈め、其油斷の折を伺ひ、唐土より攻め來らば、何の苦もなく勝ち軍。何と日本人の計略は、又格別でござりませう。

照烈　聞き入つた汝が才智。して和國の樣子、內通の書簡は。

小平　ハツ、則ちお頭より送り越されし密書。

ト懷中より一通出し、照烈王に渡す。照烈王取る。

是れこそ日本の諸大名、又は山賊、海賊、野武士に至るまで、皆お頭への一味徒黨の連判。送り越したるは、則ち、高麗國と合體の印し。（ト一卷を差出す）。

照烈　成る程、此密書に、新羅、百濟、高麗、右の國地利の一卷と、日本過半一味徒黨の連判を。

ト懷中より蔦の錦の一卷を取出し

是れこそ三國地利の一卷。まつた此表具は、則ち高麗の重寶、蔦の錦、合體の印し。

ト差出す。兩人、互ひに取り遣りする。

小平　すりや、是れが三國地利の一卷。表具は、則ち蔦の錦。

照烈　日本過半、一味連判。（ト兩方一度にこなしあつて）

兩人　エヽ、忝い。

ト戴く。此時奧より、照菊窺ひ出て

照菊　此一卷を。

ト小平太が持つたる一卷を、後より引き取り、逃げうとする。小平太、照菊女を引き捉へ

小平　此蔦の錦を奪ひ取るは、さては、心を懸けし瀨川采女に渡さん爲よナ。

照烈　ナニ、妹は瀨川采女に心を通はすとな。

小平　ほてくろしい不義の樣子。

照烈　ハテ、憎くい女め。

小平　先づ此一卷を。

ト取りにかゝる。少し立廻り、照烈王、劒を拔いて

照烈　韃粗への見せしめに。

ト照菊女に切つて懸かる。又ドロ〳〵にて、照烈王、小平太が方へ仕かけにて、軒の蔦、ひらめきて兩人を惱ます見得。照菊女、一卷を持つて、橋懸りへ走り入る。兩人行かうとする。大ドロ〳〵にて、小平太、照烈王引き戻され、照烈王は、劒を橋へ、キツト見得。小平太は、蔦に引戻されし見得にて、兩人二重舞臺に宜しくとまる。チヨン〳〵にて道具。

右二重舞臺の前へ、一面に、浪幕下りる。浪頭、打ち掛ける。大ドロ〳〵にて、震動、雷電の見得。是れにて舞臺先き。花道兩側へ、浪板せり上がる。此時橋懸りより、唐船一艘、出す。兩車の音して、物凄き見得にて、臆病口より、照菊女、右唐裝束の上へ菅笠着て走り出て、こなしあつて

照菊　アヽ嬉しや。此處（こゝ）まで追ッ手は來ぬさうな。（ト右の唐船を見て）エヽ、忝い。此船にて戀ひ人の跡を慕ひ、尋ね廻れと天の與へ。さうぢや。

ト又ドロ〳〵、雨風の音にて、照菊女、右の船へ乘り、艫を押し立てると、仕掛けにて船、花道へ行きかゝる。處へ、張喰、下官四人連れ出て、此體を見て、船の友綱を取つて

張喰　下官共。此綱を引ッぱれ〳〵。

皆々　ハアツ。

ト張喰、下官、皆々綱を引ッ張る。此内、右震動雷電、宜しくあつて、照菊女、いろ〳〵焦せるこなしあつて

照菊　エヽ、情けを知らぬ者共、見遁がしてたもいなう。

張喰　イヽヤ、ならぬ。官人共、力一杯、曳け〳〵。

皆々　ハアヽ。

ト引ッ張る。照菊女、懷劒にて、友綱をフツッと切る。張喰、皆々、綱を持がら、後の海へドタ〳〵と皆々倒る。照菊女、懷劒を口に咬へ、向うへ艫を押し切り入る。仕掛けにて船、向うへ逸散に入る。ト口上出て

東西々々、斯樣に仕りまするが發端。凡そ一歳（とせ）以前の儀。これより「傾城青陽鷄（けいせいはるのとり）」、大序の始まり、左樣に御覽下さりませう。

ト口上入る。すぐに幕明ける。

大序

御室花見の場

登場人物　女陸尺（ろくしやく）、照葉。河田歩左衞門。小姓、左近。禿、文字野。舞ひ子、小櫻、同、初音。同折鶴。仲居、お市。女陸尺、松江。千本姫。喜代姫。幇間、鳴吉。御嶽伴作。斧木軍藏。犬山喜藤治。長井隼人。女陸尺、瀧野。同、山路。長崎昆崙壽、小田之助信雄。白拍子、濱荻、筒井順慶。ばくち打ち、鐵八。闇屋、本名 瀧川奥方、闇の戸。瀨川釆女。小早川帶刀。女陸尺、小谷。宅間小平太。腰元、裏葉。奴、木田平。傾城、園菊。本名 照菊皇女。順禮、十作、本名 高川瀨平。金井山九郎。三輪五郎左衞門元秀。三七郎信孝。眞柴小一郎。紅梅組み、四人。上下侍ひ、大勢。軍兵、大勢。

造り物、御室の御所花盛りの體。向う奥深に、築地、所々に見事なる櫻の木、同じく吊り枝取合せ宜しく、三方に花見幕、毛氈を掛けし床几など、取付けよくあるべし。幕の内より、小田之助信雄、若殿の拵へにて、着付け素袍、袴、上を脫ぎ掛け、花子の狂言のなり形。濱荻、打拔き廣袖、さいぎ付きの衣裝、襠、白拍子の拵へにて、兩人、せり合うてゐる體。喜藤治、伴作、右衣裝、羽織にて信雄をとめてゐる。舞ひ子、折鶴、小櫻、初音、濱荻を留めてゐる。千本姫、振り袖、衣裳、襠、姬の形。腰元裏葉抱へ帶、置き帽子にて、是れも双方なだめる心の見得。摺り鉦入りのだてなる囃子事、此中にて幕の内より

信雄　ヤア〳〵、留めるな〳〵。

喜藤治、龜五郎、伴作　マア〳〵、待たつしやりませ。

トロ々（くち〴〵）に留める體にて幕明く。鳴り物は早くあるべし。

折鶴　濱荻さん、もうよいわいナア。

濱荻　イエ〳〵、留めて下さんすな。又しても殿樣の惡性、わたしや氣が濟まぬわいナア。

信雄　どうしておれが惡性ナ。

濱荻　惡性な譯、申しますぞえ。

信雄　オヽ、聞かう。

濱荻　申します。（ト又せり合ふを皆々、とめて）

折鶴、初音、小櫻　マア、待たしやんせいナア。

喜藤　若殿、これはマア、どう致したことぢや。信長公の御公達（ごきんだち）、小田之助信雄樣ともあらう者が、下々（しも〴〵）の女夫（めをと）喧嘩が何ぞのやうに、餘りはしたないと申すものぢや。

軍藏　喧嘩の來歴が知れぬに依つて、挨拶もならぬてや。

伴作　一體マア、何から起つた事でござります。

信雄　さればいヤイ。今日の趣向は、此御室の花見へ持込んで思ひ付いた遊興。其方達も知つてゐやらうがな。

喜藤　されば、遊山事もしつくして、珍らしい趣向も無いぢや。そこで今日は此櫻の庭を、能舞臺にして、

軍藏　亂舞方は、九條の里の舞ひ子共、美なる者を此通りに狩り集め、

伴作　中にも濱荻樣といふ白拍子の飛切りは、若殿の閨の花。

千本　自らは兄上のお見舞ひ、本國安土から、此御室へ來合して、次手ながら此遊興。

裏葉　お姫樣のお供に付添うて參りまして、面白い事の數々。取り分け、若殿樣の御機嫌もようて、かやうなお嬉しい事はござりませぬ。

信雄　花子の狂言。某は、シテの役。（ト小唄の節にて）「綾の錦の下紐は、解けて中々よしなや、柳の糸の亂れ心は、いつ忘られぬ。」

ト言ひ〳〵、裏葉の手を取り、眞中へくる。

裏葉　モシ、何を遊ばしますぞいナア。

信雄　狂言の相手にするのぢや。

ト裏葉に抱き付かうとする所を、濱荻引き分け

濱荻　イヽエ、さうはさゝぬ。お姉の裏葉樣、愚かしい殿樣を唆かして下さんすなえ。

ト腹立てる、裏葉氣の毒なるこなし。

喜藤　さては、殿が餘り手まめなるに依つて、こりや、お悋ぢやな〳〵。

折鶴、小櫻、初音　みんな濱荻樣が尤もぢやわいナア。

軍藏　それは挨拶ではなうて、けしかけるといふものぢや。

伴作　それと云ふも、太郎冠者がゐぬに依つてぢや。

信雄　マア、濱萩が機嫌直しに、太郎冠者を呼び出さう。

喜軍、伴藏　一段とよからう。

信雄　いかに、太郎冠者あるかヤイ。

ト橋懸りの内より

山九　ハアヽ。

ト言ひ〳〵山九郎、狂言師の形にて、橋がかりより、ツカ〳〵と出て

御前に候ふ。

信雄　念なう早かつた。

山九　ハア。

信雄　（山九郎を見て）ヤア、其方は、本國の家來、金井山九郎。

濱荻　ほんに兄さんぢやわいナア。

喜藤　すりや承り及んだ

皆々　山九郎とな。

山九　成る程、各〻方は京詰めの御家來なれば、御見知りはござらぬ筈。拙者ことは、御本國安土に於て、三ヶ年以前先將軍信長樣のお見出しに預り、それなる小田之助樣へ、小鼓、又は謠ひなどを御指南申せと御諚意を蒙り、それより晝夜共、お側に附添ひ、お守り役やら、御家來やら、次第にお取立て下され、只今にては御近習方と同格のお勤め。その緣を以て、これなる妹をお召し出しに預り、剩へ御寢所のお伽と申すは、妹めが活計、拙者が仕合せ。サ、かやうな事ばかり申しては御遊興の妨げとも存ずるから、侍ひ格の出仕を取置き、御遊興の其中へ、罷り出でたる太郎冠者が

此姿、今某の因緣、かくの通りでござりまする。

信雄　出かした〳〵。本國にて遊ばうと思へば、三輪五郎左衞門と云ふ家老の親仁めが、クシヤ〳〵と突くやうに言ひをる。そこで、毛虫の親仁めを欺して、此御室へ持出して遊興。コリヤ、山九郎、本國へ歸らうとも、親仁めに告げるなよ。

山九　其儀は承知致してをりまする。

信雄　ヨシ〳〵。何でも今日一日は、主も家來も無禮講ぢや。

山九　よからう〳〵。無禮講とあれば、わが君を差置いて、いかに、阿呆よ。

信雄　何ぢや〳〵。

山九　甚う座が滅入つて見える。いつそ妥て都風流踊りはどうあらう。

信雄　よからう〳〵。

喜藤　高なしに、踊れ〳〵。ヤア、千代の始めの一踊り。

軍藏
伴作　松は、松坂越えたえ。

ト踊りの太鼓三味線になり、小田之助を始め、皆々、踊る。山九郎も不調法な身振りにて踊る。

ト此うち向うより眞柴小一郎、衣裝、上下にて、侍ひ連れ出る。臆病口の花見幕の内より、順慶、入道の拵、

へ、着附け、長袴、すべて赤仕立ての拵へ好みあり。小一郎花道に立ち留り、此體を見て

わが君様、何れも此有様は、

喜軍伴　ヤア、こなたは。（ト悔り、鳴り物止む）。

順慶　信雄公、好い加減と馬鹿を盡くさつしやれ。

信雄　其方は筒井順慶。久吉が倅、眞柴小一郎。

小一　ハツ。

ト本舞臺へくる。山九郎、上の櫻の木の傍へ、遙か退いて控へる。小一郎、よき處へ直り

わが君様には御機嫌美はしき體。先づ以て喜ばしう存じまする。

順慶　此順慶は大和一國の大名。先君信長公は、美麗を好みし活氣の大將。お氣に入りの此順慶、出仕の節も緋の小袖をお免しあつて、お膝元の荒奴、紅梅組みの司を預る。出頭たる身共が目通り、見苦しい女郎ども、控へてをらうぞ。

ト睨む。女形皆々怖がり、後ろへ寄る。

喜藤　順慶様、御意の通り、信長公の軍兵は、他家にかはつて、お馬の先きに赤揃へのお坊主、出陣の節お手打ちあつて、是れを血祭りと相定む。其司たれば、あの如く赤揃へのお姿。ナント變つた格

式ではござらぬか。

皆々　さやうでござる。

信雄　小一郎、して其方が參つたは。

小一　其仔細と申しまするは、此度帝の勅命に依つて、勢州北畠友成卿の御息女、八重姫様を以て、小田之助様へ娶せよとの、父久吉へ勅命下つてはござれども、父にて候ふ久吉は、幼君三法師君を守りの爲め、安土御殿に在城。それゆゑ父が名代として、右の計らひ。卽ち八重姫様をこれ迄お供仕つてござれば、急ぎ御祝言を遊ばされ、今日より北畠宰相信雄公と、御名乘りあつて然るべう存じまする。

濱荻　殿さん、お前は、祝言をする氣かえ。

信雄　サア、それはの。

順慶　縁談の儀は、私しならぬ禁裏のお指圖。違背あつては違勅の大罪。思案して返答さつしやれ。信雄公、何とてござる。

信雄　サア、さういふ事、只否も言はれまいが。

濱荻　御祝言の盃より先きへ、わたしや相果てますぞえ

信雄　滅相な、其方は殺さぬ。

順慶　放埒の段々、禁廷へ申し上げうか。

信雄　サア、それは、

濱荻　いつそわたしが、（ト死なうとする）

信雄　コリヤ、早まるまいぞ。

小一　此方への御返答は。

信雄　サア、それは。

濱荻　矢ッ張り、わたしが。

信雄　これは短氣な。

順慶　祝言召さるか。

信雄　サア、

信雄
順
小　サア〳〵、

順慶　御返答は、

順慶
小一　何とてござる。

信雄　これは又困つた事ぢや。

ト頭を掻いて、當惑の體。此時、山九郎向うへ出る。

山九　イヤ〳〵、わが君。憚りながら、コリヤ、ちと、御胸中が狭いかと存じまする。

信雄　山九郎、何と言ふぞ。

山九　されば、君にも御存じの通り、去年、御父信長公薨去あつて、未だ一週忌には相成りませねど、御公達、信孝公、信雄公、御二方の内にて、小田の御家督を相立てんと、諸大名、御評議の折柄、禁廷より御指圖の御縁邊。御違背あつては違勅のお咎め。事に依つては小田家の断絶の基ると成りませう。此儀は一旦お受け遊ばさるゝがよからうと存じまする。

濱荻　アヽコレイナ、それでは。

山九　妹、默れ。そち達が差し出る處ではない。控へてをらうぞ。

濱荻　なんぼ、どのやうに言うても、此濱荻に見替へて。

山九　サヽ。そこが御縁のあると、ないと、先づ一旦御祝言遊ばされ、其上でお心に入りませずば、離縁致すは世間にはいくらも。

ト言はうとして、順慶が方を見て

サヽ、さやうの儀はござるまいが、何を申しても過去生の緣づく。後しての思案は拙者めにお任せなされ、先づ〳〵お受け遊ばさるゝが、幾重にもよからうと存じまする。

信雄　サア、さういふ事なら、よいやうに計らうてよからう。

山九　すりや、御承引ござらうとな。順慶樣、小一郎樣、御祝言御承引とござる。各〻方にも御滿足でござらう。先づ落ちついた。

ト こなしあつて、又元の通り片側へ控へる。

順慶　小一郎、八重姫樣を同道とあるが、善は急げぢや、早く伴ひ召され。

小一　成る程、御承知とある御一言が、取りも直さず、吉日良晨。

信雄　すりや、此ところで

濱荻　祝言をするのかいナア。（ト腹立てる）

千本　みづからは待ち女郎。

裏葉　櫻のお庭の大島臺、長柄九獻も有り合ふ三々九度。

杉鶴　早う嫁君が、

皆々　見たいわいナア。（ト小一郎、花道に向ひ）

小一　お姫樣お乘り物、御前間近う、早う〳〵。（ト向う戸屋の内にて）

小谷　ハア。

ト聲する處へ、所地入りの軟らかな合ひ方になると、向うより、小谷、關屋、松江、瀧野、山路、照葉、右六人、各々女陸尺の拵へ、着附け帶の好み、髮結ひ振りなどに好みあつて、各一樣の姿、鋲打ちの女乘り物、隨分結構に飾りし本式の乘り物にて、小谷、先きに立つて、棒端に片手を掛け、關屋、松江先き棒を片手にかゝげ、瀧野山路後棒を兩手にかゝげ、照葉後棒の端に片手を掛け、各々見得にて出て、花道に立ち留まる。

小谷　お供廻りは、御門前に控へさせ、お乘り物に附添ひのわれ〳〵、姫君樣をお伴ひ、

六人　申しましてござりまする。

小一　すぐざまこれへ。

小谷
皆々　畏りました。

ト乘り物を橋懸りへ直し、六人とも橋懸りに並ぶ。

順慶　ムウ、小田家に於ては見知らざるお手輿の女ばら、われ達は新參ぢやな。

小谷　此度安土御殿へ召抱へられましたる女陸尺のわれ〳〵、お姫樣に附添ひ來れと、政所（まんどころ）樣の御意。

関屋　お屋敷の勝手さへ、まだ初ういういしい新参者。
松江　お譜代とも思し召されまして、
瀧野　御用もあらば、
山路　何によらず、
照葉　仰せ付けられ下されませうならば、
六人　有り難う存じまする。（トこなしある）。
信雄　一旦は否といふもの〻、また嫁入りといへば憎うない。一時も早う花嫁のお顔を。

ト行かうとして、濱荻を見て

サア、祝言をせねば此場が濟まず。
濱荻　アイ、御祝言遊ばせ。目出度いいい。ほんに此やうなアタ目出度い事はない。美しさうな嫁御様に
マア、わたしから。御見もじ入らうわいナ。

ト乗り物の方へ行かうとするを

順慶　ヤア、出過ぎたる女め、控へてをらう。
濱荻　それでも。

順慶　まだまだ。すッ込んでをらうぞ。
濱荻　エヽ、何の事ぢやい。（トひんとして元の所へ來る）。
順慶　サア、姫君を早く早く。
小一　八重姫君には、これへお越しあられませう、

ト立寄って、乗り物の戸を明けると、乗り物の内より、六ッ斗りの女兒、芥子坊主の頭を姫のやうに拵へ、振り袖、衣裳、裲襠、姫の體にて、出る。小一郎、眞中へ連れて出て、好き所に座らす。皆々悔り。

順慶　ヤア、北畠の息女、信雄公の嫁御寮と云うたは。
小一　何と姫君の御器量、小田之助様のお心に叶ひませうがナ。

ト信雄、こなしあって

信雄　そんなら、ほんまの嫁ではなうて、
濱荻　此いとさまと、
裏葉　御祝言を、
皆々　させますのかいナ。
喜藤　何の事ぢやや。

順慶　小一郎、仔細を云やれ、何とぢや。

小一　御合點が參りますまい。先達て、御緣邊の勅命ござありし處、八重姫樣には、當春御病氣によつてお果て遊ばされしによつて、此儀禁延へ聞えては、御一家の御ちなみも破れ、兩家御疎遠の基。それ故御妹君幼少ながら、此喜代姫君を八重姫樣と名づけ、假りの御緣を結び置いて、其上にて、御心に叶ひし女を八重姫樣と名付け、御祝言あるべしと、事を納める父久吉が計らひ。仔細と申すは、かくの通りでござりまする。

順慶　ハテなア。（ト思ひ入れ）。

小一　姫君には、聟君樣へ御挨拶あられませう。

喜代　コレ、をぢ樣、今から可愛がつて遊ばして下さりませう。

信雄　可愛がらいで何とせう。コリヤ、裏葉、嫁を爰へ連れて來い。

裏葉　ハイ〳〵。サア〳〵、嫁君樣、お越し遊ばせいなァ。

　　ト喜代姫を信雄の傍へ連れて行く。

信雄　ドレ〳〵。先づ器量も好し、今では巣が閨の花。何と濱荻、此姫と夫婦に成るが腹が立つか。

濱荻　何のマア、キッとお取持ちを申しますわいナァ。

裏葉　ほんに可愛らしい嫁御樣、わが君樣とお寢間の睦言に、必ずヤンチャをおつしやるなえ。

　　ト此內、山九郎、傍なる櫻の枝を手折り、恭しく眞中へ持つて出て

山九　千秋萬歲の持遊びをこそ奉る。

　　ト諭ひながら眞中に座り、折り枝を下に置く。

ハ、、、、、目出たいわ〳〵。お過ぎ遊ばされた姫君を、御幼少な妹君を以て間に合せ、勅諚をも違背せず、兩家のちなみを結ぶと云ふは、今に始めぬ久吉樣の頓智發明。此喜代姫樣は、取りも直さず姉君の八重姫樣へ、此八重櫻の一枝は、花嫁といふ引き出の音物（いんもつ）。お納め下さりませう。

　　ト折り枝を喜代姫に持たす。喜代姫、小一郎の方へ見せて

喜代　此花を貰うた、嬉しい〳〵。

信雄　是れから客殿へ行つて、祝言のざんざ。幸ひ、此順慶は色直しの赤坊主。

順慶　アイヤ、拙者はこれに。

信雄　主命を背くか。

順慶　全くさやうては。

喜伴　信雄公の御意でござるぞ。

順慶　さやうならば、いかやうとも。

小一　拙者めも、お取持ち。

山九　お手輿の女中達も、休息さつしやれ。

小谷
皆々　畏りました。

信雄　サア、皆の者、山九郎も奥へ。

山九　先づお入りあられませう。

ト唄に成り、信雄、濱荻を連れ、裏葉喜代姫を連れ、順慶、小一郎、千本姫、折鶴、初音、小櫻、小姓、喜藤治、軍藏、伴作入ろ、陸尺の人數殘りゐろ。面白き誂への合ひ方に成り、皆々向うへ出て

小谷　ナント、皆樣、國元と違うて、花の都は何處もく、賑はしいてはないかいなア。

照葉　取分けて此御室の景色、吉野、初瀨も及びない、花盛り。二千里の外、故人の心とよみたれば、詠めばかりか、花にも猶心あり。

松江　春の霞を立てこめて、眩い程に咲いた櫻。

瀧野　有情非情と隔たれど、心あればこそ、詩にも作り、歌にも詠む。

山路　「世の中に、絕えて櫻のなかりせば、春の心はのどけからまし。」

小谷　「はるかに人家を見て、花あれば卽ち入る。貴賤と親疎とを論ぜず。」

照葉　其朗詠は、白居易が花の秀逸。見ぬ唐土の書にも乘せ、詠めに飽かぬ櫻の花。

關屋　散りも初めず、

照葉　ハテ、うらゝかな、

皆々　眺めぢやよなア。

ト各〻、花を詠める心。處へ奥より、軍藏、長柄の銚子を持ち、伴作、三寶盃を持ち出て、軍藏は上の方、伴作下の方にゐて

軍藏　お手輿の女中方、これにござるか。御祝言のお悅びとあつて、こなた衆にも御酒を下さるゝ。

伴作　打こんじて一獻、お酌みなされく。

ト長柄三寶を下に置く。

軍藏　時にかう見る處が、どれもく、荒くましい所作にお似合ひなされず、美しい御面相。何と、屋敷勤めて男に乏しくござらうな。どうだ、ちよびと出かけて見る氣はないか。

ト小谷が手を執らうとする。小谷突き退け

小谷　何するのぢや。

軍藏　ハテ、男の味を見せまするのぢや。

　　ト又手を持たうとする。小谷、軍藏が手を締める。

　アイタ〳〵〳〵。コリヤ、どう召さる〳〵。

小谷　大奥を勤めるわれ〳〵、不義は元より、男たいした者に、ちよつと手もさはらせまいと、腕(かひな)には此通りの御判。目を明けて、てんがうさんせ。

　　ト手を持つて振り廻し、宜しく取つて投げ

　皆さん、見やしやんせ。何とマア、阿呆ではないかいな。

　　ト軍藏、腰骨を抱へる。伴作、肝を潰す。

關屋　腕(かひな)に押した御判。手出しして消すが否や、其相手ともに縛り首にあふと云ふは、何處(どこ)も變らぬ武家(け)の掟。

瀧野　お屋敷の格式、勝手を知らぬ、

山路　明き盲目(めくら)てがなあらうわいナア。

伴作　ハヽヽヽ。色事といふ物は、さう張りがある程、猶面白いものぢや。ドレ〳〵、身が出かけて見よう。

　　ト照葉に抱き付かうとする。照葉、伴作が首筋摑んで

照葉　見さんせ、馬鹿な野郎ではないかいな。（ト突きとばす）

小谷　お次ぎへいて休息せう。

關、瀧、松、山　サア、皆さん。

關屋　ゝざんせ。

　　ト伴作、寄るを照葉、平手にて伴作の顔をはる。唄になり、皆々、臆病口へ連れ立ち入る。軍藏、腰骨を抱へ、伴作顔を顰めて

軍藏　伴作どの、

伴作　軍藏どの、

軍藏　お互ひに

兩人　痛み入りましてござる。

　　ト軍藏は、腰骨抱へ、伴作は顔を抑へ、二人とも入る。

　　ト祇園囃子になると、向うより、傾城園菊、道中の心にて出る。禿、文字野。仲居、お市、幇間、鳴吉。附き出る。

文字　モシ、太夫樣。爰が御室とやらいふ處かえ。

お市　サア、この御室の花も及ばぬ太夫すの出立ちばえ。九條の里から遙々と、駕籠の衆は、門前に待たして置いて

鳴吉　櫻の庭の八文字は、今の世の御全盛、こちの町の親王樣と、ホヽヽヽヽヽ。ヤッチャ〳〵。

園菊　鳴吉樣の、又惡口が始まつたわいな。お前方にも咄した通り、今日は釆女さんが、此御室の御所へ御用があつてござんすと聞いたに依つて、急に逢ひたいこともあるし、お前方を頼んで、連れ立つて來たのぢやわいナア。

鳴吉　附き出した晩から、釆女樣にお逢ひなされ。外の座敷は上の空。モシ、あまり浮き名が高うござりまするぞえ。

お市　釆女樣のお出てある迄、暫く彼處へ。

園菊　花見でもせうわいナ。

文字　サア、ござんせいナア。

ト始終鳴り物にて、皆々舞臺へ來て、園菊、床几に凭る。此内橋懸りより、鐵八、藁苞の刀を持ち、人を尋ねる心にて

鐵八　どうぞ逢へばよいが。（ト言ひ〳〵出て、園菊を見付け）ヤア、わりや、園菊ぢやないか。

園菊　ヤア、お前は。（ト逃げうとするを鐵八、捉へ）

鐵八　何處へ〳〵。一寸も逃がすことはならぬ。われは〳〵。

ト引摺らうとするを、皆々支へて

お市　狼籍な、何としやんす。

鳴吉　無法な事はさゝんぞ。

鐵八　エヽ、面倒な。のいてけつかれ。（ト皆々をはり退け）園菊、われに逢ひたかつたわい。マア、下にをれ、下にけつかれ。

ト無理やりに坐らせる。園菊、こなしあつて

園菊　鐵八さん、今日はわたしの身をわたしが揚げての物詣で。廓の内を逃げ走りはしやんせぬ。用があるとは何の用ぢやえ。

鐵八　オヽ、用がある。ずんとあるのぢや。一體われをかういふ傾城にした其もとはと云へば、去年の秋、ちつと樣子があつて、九州の方へ下つて行た時、肥前の國松浦の濱邊にうろたへてゐたわれ。其時の形は稀有な形であつたわい。唐人仕立てに詞は日本。樣子を聞けば、唐からの迷ひ子。ど

うぞ此日本に足が留めたうござんすわいなァと、涙をこぼしておれを頼む。ア丶不便な事ぢやと思うて、直ぐに上方へ連れて上つて、折節おれも仕合せは悪し、得心づくで九條の里へ、ガラリ百兩で賣つてやつて、其金は博奕(ばくち)の元手、われは傾城になつて、日本の男の食ひ飽きをする。それといふもおれが庇(かげ)ぢや。すりや、此鐵八を、親とも兄とも大切にさらす筈ぢやぞよ。

園菊　サイナァ、其お世話があるに依つて、お前の言はしやんす事は、何に依らず聞くてはないかいナァ。

鐵八　吐(ぬか)しやがんな。おれが言ふ事を聞くなら、何故(なぜ)應と言はぬ。

園菊　そりや何をえ。

鐵八　さるお歴々のお侍ひ様が、われが事を思ひ込んで、毎度廓へ通うて、呼び出しに遣らる丶さうなが、今日(けふ)は揚げぢや、明日(あす)は約束があると、擂り抜けて逢はぬげな。そこでこの鐵八を呼んで、われを頼む、どうぞ太夫を口說き落して呉れ、得心次第直ぐに身受けする、われにも褒美を遣らうとの事。園菊、此鐵八が恩を忘れぬといふ心ならば、應と言うて身受けをしらる丶か。但しは否(いや)か。返答せい。どうぢや。

園菊　わたしが身を、かうして苦界に沈めたは、身に望みがあつての事。若し身受けを否と言うたら、

鐵八　相手は侍ひ。事に依つたら、命づく。

園菊　得心せうと言うたらば

鐵八　身に叶うた大きな仕合せ。

ト園菊ちよつと思案して

園菊　成る程〳〵、よく〳〵に思ひ廻(めぐ)らして見れば、一生の此身の納り、殊に相手は歴々のお侍ひさん。

鐵八　さうとも〳〵。

園菊　身受けとあるは此身も仕合せ。

鐵八　世話やいたおれも仕合せ。

園菊　こりや、お前の言うての通り、

鐵八　應と言つて、

園菊　身受けしられて、

鐵八　行く氣か〳〵。

園菊　アイ、と言うたらお前の勝手はよからうけれど、否(いや)でござんす。

鐵八　ヤア。

園菊　一旦否と言うたれば、變ぜぬが勤めの張り、里の諸譯といふのは、深かァいものでござんす。皆樣、花でも見よう。ござんせ。

ト唄に成り、園菊こなしあつて、皆々連れ立ち、臆病口へ入る。鐵八殘つて

鐵八　此奴、一筋繩では行かぬわいヤイ。

ト手を組むこなしあり。此內、橋懸りより小平太、衣裳上下にて出て

小平　それにをるのは鐵八ではないか。

鐵八　あなたは小平太樣。

小平　幸ひの所で逢うたワイ。して頼み置いた事は、どうぢや〳〵。

鐵八　サア、今も今とて、身受けの事を勸めましたが、イヤモウ、酢でも、蒟蒻でも行く奴ではござりませぬ。

小平　さうあらう。去年身共が、高麗に在りし折柄、蔦の錦を横取りひろいだ女郎め。彼の地にて行くへを失ひ、歸朝の後、樣子を聞けば、彼奴も日本へ渡り、園菊といふ傾城姿、直々に詮議致さば、兎や角と爭がうは定。そこで其方を頼んで、身受けの談合。いよ〳〵得心せぬとな。

鐵八　私しも如才はござりませぬ。

小平　ムウ、よい。然らば又、外に手段もあらう。それは格別、鐵八、彼の一品を持參したか。

鐵八　兄御の宅間玄蕃樣に頼まれて、去年六月、本能寺騷動の中へ紛れ込み、盜み出した蛙聲丸の一振り、暫くぼく除けの爲、方々を馳け廻つて、もう世間も鎭まつたと思うて、持つて來た此蛙聲丸。

ト出して見せる。

小平　出かした〳〵。身共が兄、玄蕃どのへ渡さう。其劍これへ。（ト取らうとする）。

鐵八　待つた。滅多には渡されぬ。

小平　渡されぬとは。

鐵八　さればぢや。首がけの仕事で盜み出した此劍。國郡と釣替へでなければ、何時知れぬ人の身の上。

小平　此奴、きつしいくな奴だわい。

鐵八　當世、掛け商ひに懲りてゐやんすぢや。

ト小平太思案して

小平　此方の大望成就する迄、町家に置くも手段の一つ。よいわ、其劍預けて置かう。

鐵八　何時なりとも褒美と釣り替へ。

小平　此方より便りする迄、人手に渡すと身の上だぞ。

鐵八　ハチ、野暮な代物（しろもの）、手離してはおれが身の上。
小平　して、其方は。
鐵八　粟田口の在所で、
小平　鐵八と尋ねたらば、
鐵八　隱れはごんせぬ。
小平　よいワ。人の見ぬ間に、
鐵八　小平太樣、
小平　早く行け。
鐵八　去らば。

ト唄になり、鐵八は橋懸かりへ、小平太、思ひ入れあつて、臆病口へ別れ入る。
ト向うより采女、衣裳上下にて、後に木田平、鎌子奴にて附添ひ出る。

采女　木田平、只今の大勢連れは、慥かに御所方（ごしよがた）と見えるナ。
木田　一ぜんめが附いてをつた處は、慥かに御所でござりまする。
采女　練りの帽子は美しかつたぞよ。

木田　彼方（あつち）も見返つてをりました。
采女　御用先きでなくば、たゞは置くまいものを。
木田　アッタラ物を見遁がしました。

トこんな事を言ひ〳〵舞臺へ來て

木田　若旦那、花の蔭で暫く御休息あらまれせう。
采女　ナニサマ、暫く休んで來らう。

ト床几に掛かる處へ、臆病口より、隼人、衣裳上下にて出て

隼人　これは瀬川采女どのでござるか、
采女　長井隼人どの、サヽ、これへ。
隼人　イヤ〳〵、お構ひ下されな。此床几で一服致さう。

ト外の床几へ腰掛ける

木田　イヤ、若旦那へ申し上げまする。今日の御公用の儀は、いかていな儀でござりまする。下郎めにもお聞かせ下さりませう。
采女　成る程、其方は樣子は知るまい。去年某が高麗より持ち歸りし五色の蔦かづら。戰國の折柄なれ

ば、暫く當御室の御所に預け置かれ、某には恩賞とあつて、小田の姫君千本姫樣を宿の妻に下し置かれんと政所のお指圖。此身に取つては、上もない大慶。然る所、今朝これなる隼人どのを以て、大内記錄所よりのお使者、彼の五色の蔦を、當今御叡覽あらんとの事。それ故當寺の寶藏に預けある、五色の蔦を取り出し、隼人どの同道にて、明朝未明に大内へ持參の役目ナント隼人どの、右の段、寺中へも御披露下されたかナ。

隼人　成る程、坊官まで通達致し、貴殿のお出でを相待ちをりましてござりまする。

采女　木田平、其方も粗略のないやう、相心得てよからう。

木田　ネイ〳〵、それで樣子が相分りました。

ト此内、臆病口より、裏葉出て、木田平を招く。木田平見て、今は折が惡いと、いろ〳〵仕方する。

采女　シテ、御兩君にもお入りでござるかナ。

隼人　イヤ、三七信孝公には、後ほどお入りとの知らせ。御舍弟信雄公には、今朝よりお入りあつて、只今御遊興の最中でござる。

采女　然らば、信雄公へお目見得致さう。木田平々々々、コリヤ、木田平。

木田　ナイ〳〵。

采女　某は方丈へ參る程に、其方も參れ。

ト立ち上がり、振り向くハズミに裏葉と顏見合す。裏葉、隱れる。采女、こなしあつて

ハ、ア、聞こえた。これぢやナ。

隼人　采女どの、これぢやとは、どれでござる。

采女　サア、それは何でござる、櫻木のほとりへ美しい鳥が出ました。

隼人　ハア、何鳥でござらうナ。

采女　あれは何鳥でがなござらうぞ。

木田　イヤ、若旦那、方丈へお供仕りませう。

采女　イヤ〳〵、某は隼人どのと同道を致せば、汝はこれに控へて、鳥の正體見屆けをらう。

隼人　サア、御案内仕らう。

采女　どりや、方丈へ參らうか。

ト唄になり、采女こなしあつて、隼人連れ立ち、臆病口へ入る。合ひ方になり、裏葉向うへ出て

裏葉　木田平どの、待ち兼ねたわいナア。

木田　お身も嗜んだがよい。若旦那のござるのに、ツカ〳〵と出て來て、すんでの事に見付られて見い

お手打ちになる事だわい。

裏葉　何を言はしやんすやら。采女樣は見てござつたわいナア。

木田　今のを見てござつたか。

裏葉　アイナア。

木田　南無妙法蓮華經

裏葉　櫻木の小鳥に譬へて、正體を見屆けいとは、しつぽりと話しせいとの謎々。粋なお主樣に使はれるやうにもない、氣の堅い木田平どの。

木田　アヽ、コレサ〳〵。今日はお供先きだから、話してはをられぬ。御用があるならば、近日々々。

ト行かうとするを留め

裏葉　イヽエ、大事ない。

木田　大事ないとは。

裏葉　さればいナア。采女樣に言ひ號けのある千本姫樣は、わたしがお主。其家來のわたしと、采女樣の御家來のお前と、家來と家來が懇ろするは、みんな、アノ、お主樣へ忠義ぢやわいナア。

木田　ハテ、得手勝手な忠義ぢや。

裏葉　過ぎし頃、政所樣の仰せを受けて、お姫樣をば賴みの音物、お文の使ひはわたしが役。采女樣の母御から、お返事を遊ばす間、暫く其處の待合ひの

木田　其時おらはお關ひの掃除に出て、何かお目出たの御酒には醉ふ。ほろ醉ひ機嫌で見廻せば、揚貴妃か、天人か。

裏葉　ほんにマア、苦味の走つた、きつとした、しやんとした奴さんぢやと、

木田　おらが思へば

裏葉　わたしも思ふ。

木田　醉ひ紛れに待合ひて、ツイ、（ト顏見合せ）

裏葉　オヽ、羞かし。

ト顏を隱す。木田平もこなしあつて

木田　イヤ、其時はほんの酒機嫌、醉ひが醒めて、よく思つて見れば、不義は第一の御法度、現れたらば首道具。ヤレ恐ろしや。兎角觸らぬ神に祟りなしだ。（ト立つて側へ退くを）

裏葉　イヽエ、そりや卑怯ぢや。一旦枕を並べた上は、たとへ現はれてお手打ちに逢ふと云うても、その男へ立て通すが、姫御前の操ぢやわいナア。また何やかや話したい事もある。幸ひあの幕の內

へ、ちよつと來て下さんせいナア。

ト木田平を引ッ張る。此前より正面の中開きより、小谷出かけるこなしあり。木田平、振り切つて

木田　滅相な。晝日中（ひるひなか）、話しをせうとはこッ恥かしい、否（いや）だ〳〵。

裏葉　ツイ、ちよつとぢやわいナア。

木田　エヽ、否（いや）だわい。

ト突き飛ばす。裏葉、辛氣がる。此時小谷向うへ出て

小谷　こりや、奴（やっこ）さんの方（はう）が悪いわいナア。

ト兩人見て

裏葉　お前は最前の女陸尺。

小谷　アイ、小谷といふ者でござんす。

木田　その小谷どのが、おれをわるいとは。

小谷　サイナア。見やしやんす通り、わたしや女陸尺、お大名の大奥へも立寄る故、マア身持ちが第一、若侍ひ衆にてんごうもさせまい、ちよつと手へも觸らせまいと、此通り、胸にはお局樣の御判が据つてござんす。是れ迄堅い身でさへも、戀ひの道は格別なもので、有やうは、わたしも（トこなしあって）マア、それはそれよ。姫ごぜと云ふものは、よく〳〵罪の深いものやら、あの人にかうした事を言はうと思つても、イヤ〳〵言うては叱られうか、言はうか言ふまいかと、心には千萬無量、そこらは又男の方から、われはかう〳〵思うてゐやうがなと、汲んでやるも又、男の情けと云ふもの。コレイナア、情けを知らぬては、誠の武士とは言はれぬぞえ。

ト木田平が背中を叩く。

木田　イカサマ、さう云へば一理もあるてナア。

小谷　合點（がてん）がいたかえ。ホヽ、ヽヽ。呑み込みのよい奴さんではある。（ト此方へ來て）サア、此方はよい程にナア、あの幕の內へ連れていて話しを（トこなしあつて）ツイ手ばしこうさんせえ。

裏葉　アイ〳〵。サア、木田平どの、話しせう、ござんせ。

ト手を取り、引ッ張る。

木田　どうでも話しをするのか。

裏葉　アイ、話しせうわいナ。

木田　エヽ、儘よ。話しもせい。

裏葉　サア、ござんせいサア。

ト下座の花見幕の内へ連れ立つて入る。始終合ひ方。小谷、こなしあつて

小谷　何處の浦も戀ひのひるぢやぞ。

ト奥より、采女、文字野を連れ出る。小谷、隠れる。

采女　文字野、太夫を連れだつて來たといふが、何處にゐる〳〵。

文字　アイ、櫻の林に待つてゞござんす。お前に逢うたら、此文上げいと言うてな。

ト紅書きの文を出す。

采女　ヨシ〳〵、コリヤ、そなたはナ。

トちよつと囁く。

文字　アイ〳〵、合點ぢやわいナア。（ト走り入る）。

采女　早く行け〳〵。時に何ぞ急事でもあらう。

ト文を解き、讀まうとする處へ、千本姫出て

千本　モシ〳〵、采女樣。

トおづ〳〵言ふ。采女、ちやつと文を隠して

采女　これは千本姫樣、ハヽッ（ト辭儀する）

千本　そのやうに慇懃にして下さんすと、どうも言ひ樣がないわいナア。

采女　でも、あなた樣は小田の姫君。私しはあなた樣の御家來。

千本　イヽエ、家來ぢやない、母樣からお許しの出た夫婦の緣。

采女　サア、それはさうでも、まだ此方の屋敷へ呼び取りませねば、マア、お主なり、家來なり。主と家來が懇ろするは、あまりよからぬものでござりまする。爰は端近。イザ先づお入りあられませう。（ト慇懃に言ふ）。

千本　其やうに言はしやんすと、どうも言ひやうがないわいナア。

トもじ〳〵する。小谷もどかしがり、向うへ出て

小谷　お取持ち申しませう。

千本　ヤア、そもじは。

采女　こなたは。

小谷　采女樣、此やうに申しましたら、いかう馴れ〳〵しうも思し召しませうが、ちよつと見受けました處が、戀ひ一通りは滿更知らぬやうな、お前樣とも見えませぬ。わたしらも覺えがあるが、嫁入り前の姫ごぜの心と申しますものは、強うせきが來て、心がモヂ〳〵致しまして、それは〳〵、

どうもかうもなるものではござりませぬ。お姫様のお心根を思ひ遣りなされてナ、ツイ、ちよつと色よい御返事を、

采女　ア、、コレ〳〵、女中。其許はいかい世話燒きと見えまするナ。

小谷　私しが願でござりまする。

采女　何は格別、此采女は武士でござるぞ。

小谷　ハイ。

采女　只今も申す通り、言ひ號けはあれども、未だ輿入れがない。

小谷　ハイ。

采女　輿入れのないのに、自墮落な事は叶ひませぬ。

小谷　ハイ。

采女　それに何ぢや、見ず知らずの身を以て、押し付けた取持ち。

小谷　ハイ。

歌女　不作法とや言はん

小谷　ハイ。

采女　瀨川采女は物堅い武士ぢやぞ。（トきつと言ふ）。

小谷　ハイ〳〵〳〵。

ト手持ち無沙汰にて此方へくる。

千本　どうしたらよからうぞいのウ。

小谷　どうと申しましたら、あなたの仰しやるのが皆御尤でござりまする。待ちなされえ。（トちよつと思案して）よし〳〵、かうぢやわいナア。（ト千本姫にちよつと囁き、采女が刀を敎へ、死ぬる眞似なして、又囁き）ナ、ぢやわいナア。（トいろ〳〵呑み込ます）。

千本　大事ないかや。

小谷　大事ござりませぬ。

千本　そんなら。

ト采女が傍へ寄らうとして、接ぎ穗のないこなしにて、又後へ戻る。小谷、もどかしがり

小谷　これはしたり。初心なも時に依る。何ぢやあらうとなア、モシ（ト叱る眞似をして）ちやつと行きなされいナア

ト千本姫を、采女が傍へ突き遣る。此拍子に采女が傍へ倒けかゝり、其儘刀に手を掛けて

千本　さうぢや。おさらば。

　ト死なうとする。采女、留めて

采女　コレ、待つた。何ゆゑ御自害。

千本　此場で戀ひが叶はねば、生てゐぬ。死ぬる／＼。

采女　これは短氣な。マア／＼、お待ちなされ。

千本　聞き入れて下さんすかえ。

采女　サア、マア、そこらあたりは、にふがにふでござりまする。

　ト千本姫、どうせうと小谷を見る。小谷、又死ぬる眞似をして、突ッ込んで行けと敎へるこなし。千本姫呑み込み

千本　さうぢや。

采女　コレ／＼、得心ぢや／＼。眞實ほんまに聞き入れてをりまする。

　ト千本姫を突き離す。

小谷　ざつと納まつたわいナ。是から後は、幸ひな、あの幕の内で。

采女　イヤ、其儀は。

小谷　辭退なさると、お姫樣は

千本　相果てまするぞえ。

采女　それでは。

小谷　ぢやに依つて、幕の内へ。

采女　これは迷惑な。

小谷　サア／＼、ちやつと。（ト千本姫が手を持つて、采女が手に持ち添へ）ござりませいナア。

千本　サア采女さん

采女　これは又、迷惑な。

　ト言ひ／＼上の幕の内へ、兩人入る。小谷、こなしあつて

小谷　此方は餘ッ程、骨が折れたぞ。

　ト奥より、信雄出て

信雄　サア／＼、腹が立つぞ／＼、彼奴（あいつ）をどうしてこまさうしらぬ。

小谷　殿樣、なんと遊ばしました。

信雄　コリヤ、聞いてくれ。先刻にから濱荻の影が見えぬ。一體某は、ちつとばかり足らぬさうな。そ

の足らぬところを見込んで、慥かに隠し男を拵へたのぢや。どうしてこまさうかしらぬ。

小谷　これはあなたのがお道理でござりまする。かう遊ばせ。何ぢやあらうと、濱荻さまをお召しなされて、お詮議なさるゝがようござりまする。

信雄　ムウ、さうぢや。

小谷　お前樣は、どこぞこゝらに隠れてござる。

信雄　よし〳〵。

小谷　所へ、濱荻樣が、その隠し男に逢はうと思うて、お出でなさるゝわえ。

信雄　來さうなものぢや。

小谷　其男を尋ねて思はず知らず、お前樣の隠れてござる處へ、濱荻樣が行かしやんす。

信雄　くる〳〵。

小谷　所を捉へて、御詮議はどうござりませう、

信雄　よい〳〵、いつち好い思案ぢや。さうして、何處に隠れてゐやう。

小谷　幸ひ、あの幕の内へ。（ト正面の幕を敎へる）。

信雄　よし〳〵。隠れてゐる程に、氣を附けてくれいよ。

ト言ひ〳〵、眞中の幕へ入る。小谷、捨ぜりふあり。處へ、濱荻、出る。

濱荻　殿さん、何處にござんすぞいなア。（ト言ひ〳〵）爰にもござんせん。面妖な。

小谷　逢はせませうかえ。

濱荻　エヽ。

小谷　お前がござらぬと云うて、御立腹であらうぞえ。

濱荻　サア、それで早う逢ひたいわいナア。

小谷　御前樣はナ。

濱荻　何處にござるえ。

小谷　ツイ、あの幕の内に。

濱荻　エヽ。そんなら。（ト上の幕へ行かうとする）。

小谷　アヽ、モシ〳〵、其幕は外のぢやわいナア。御前樣のござる所はナ。（ト眞中の幕を敎へる）。

濱荻　そんなら、此幕の内。（ト行かうとして、後へ戻り）どうやら改まつたやうで。

小谷　オヽ、笑止。此のお子は、玄人のやうにもない。ドレ〳〵、わたしが。（ト濱荻を幕の傍へ連れて行つて）モシ、今のお方を上げますぞえ。（ト幕の内へ濱荻を入れ、此方へ來て、息をつぎ）マア。方付い

た程にの。（トこなしあつて）此様に人の戀ひまで世話をやくも、身につまされたわたしが願ひ。國元で言ひ交した庄助どの、別れてがら便り音づれのあればこそ其夫の行くへを尋ねう爲に、此處の屋敷、彼處の武家方、あるが中にもお手輿の奉公は、不義せぬといふ心の誓ひ。腕に押された此御判。何時か剝がしてしつぽりと、夫の傍に寢る事ぞ。思ひ廻せば、味氣ない身の上。

ト泣かうとして氣を替へ、あたりを見廻し

ホヽヽヽヽ。わたしとした事が、あたりに聞く者がなければこそ。ドリヤ、休息せうか。

ト唄に成り、小谷こなしあつて奥へ入る。ト三方の幕の内より、右人數、皆々出て

木田　其樣に、いつまで話しする物ぞ。

裏葉　それでも氣が濟まぬわいナア。

采女　マア、御用を方付けて參らう。

千本　イヤ〳〵、離さぬ。

信雄　そんな僞りは、聽かぬ。

濱荻　ソリヤ、胴慾ぢやわいナア。

ト此せりふを、皆々、こつちやに言ひ〳〵、幕を出る、采女、木田平。信雄は奥へ行かうとする。裏葉

千本姫、濱荻は留めて男共は離せと云ふ。女共は離さぬと云ふ。いろ〳〵引ッ張り合ふ。處へ臆病口より。小平太出てゝ是れを見て、

小平　ヤア、こりや、何事ぢや。

ト言ひ〳〵、揉み合ひ中へ這入る。女子共、皆々、小平太を突き退け、右の通りいろ〳〵あつて、とうどう、濱荻、小平太を信雄と取り違へ、上の方へ引ッぱる。千本姫は又、裏葉を采女かと思うて引つぱる四人、珠數つなぎに成つて引ッぱり合ふ。此間に、采女、信雄、木田平、逃げて這入る。跡にいろ〳〵あり、小平太、フナ〳〵となつて

小平　コリャ〳〵、目が舞ふ。どうするのぢや、どうするのぢや。

ト此時、皆々、顔見合せ

女三人　エヽ、お前ぢやない。

小平　間違ひぢや。

ト三人、小平太を突き飛ばして奥へ走り入る。小平太、呆れた體にて

何事ぢや。さゝほうさいの目に逢はしやあがつた。

ト呟きゐると、中門の方より、謝屋、山路、瀧野、出る。臆病口より、順慶出る。

順慶　宅間小平太。これにをるか。

小平　順慶様、いづれも。

ト合ひ方に成り、皆々あたりを見廻はし、一所へ寄る。

順慶　瀧川將監どのの奥方、關の戸どの。

關屋　夫、將監、記錄所の內意を受け、面體知られぬ自分が斯く姿をやつし、都の內を徘徊して、信孝どの、信雄どのの行跡を見出さん爲。

山路　われ〳〵は、北國の英雄、川尻肥後守が妹、山路。

瀧野　武智光秀が郎黨、開田太郎が妻の瀧野。

小平　身共が兄、宅間玄蕃、各〻方へ腹心の血判を固め、小田の四海を奪はん大望。

順慶　此上は時刻を移さず、反逆の旗揚げ。

關戸　ヤレ、音高し。謀り事は密なるを以て善しとす。久吉世に在る內は、何かに附けて大望の妨げ。近々都大德寺に於て、先君の追福を勸めし上、小田の家督を定めん爲、京都には柴田修理之亮勝重、此頃、所勞に依つて、勝重が旅館へ、諸大名寄り集り、家督定めの評議ある筈。

小平　さるに依つて、國々の空虛を窺ひ、豫て一味の高麗國へ內通し、釜山浦より攻め寄せなば、六十餘州は粉微塵。

順慶　イヽヤ、其思案、まだるい〳〵。此順慶が存ずるは、信孝、信雄、此處へこそ幸ひ、先達て一味なしたる、川尻肥後守に牒じ合せ、此御室へ不慮に押し寄せ、討つて取れば根を斷ち、葉を枯すと云ふもの。

山路　兄肥後守も手勢を以て、北山へ埋伏し、順慶様の合ひ圖を待つ筈。

瀧野　其加勢に加はつて、女ながらも、開田どのの修羅の妄執。

關戸　是れも尤も。久吉は、本國安土に在城の折と云ひ

順慶　信孝が後見、柴田修理どのは、折柄病氣。

小平　三輪五郎左衞門は、信雄どのの後見、小田家隨一の舊臣なれど、たかが七十に餘つた老いぼれ、打殺すに手間は入らぬ。

瀧野　此瀧野も一しよに。

順慶　兩人、行きやれ。

瀧野　山路さん、

山路　瀧野さん、ござんせ。

ト兩人、向うへ走り這入る。松江、出かけてゐて。

松江　さてこそ、曲者。

　　ト追はうとするを、順慶捕へて、脇腹へ突ッ込む。

小平　其女は。

順慶　燒き鳥に餌を、後日の邪魔。

　　ト刎ろ。橋懸かりより、組み子四人、赤き袢纏の拵へにて、バラ／＼と出て、

組子四人　順慶樣。

順慶　紅梅組みの荒奴(あらしこ)ども、申し附けた一儀を。

組□　ハッ、豫てよりの仰せに從ひ、お手下のわれ／＼。

組☒　小田之助が遊輿の中へ紛れ込み、

組○　不意を窺ひ、討ち取る手筈。

組×　用意一々

四人　整ひましてござりまする。

順慶　必ず拔かるな、

四人　畏つてござりまする。

關戸　みづからは大内の隱し目付け、何事も知らぬ振りにて、一左右次第禁裡へ奏聞(もん)。

小平　何かの密事は、奥へ來つて。

關戸　順慶どの。

順慶　小平太、來やれ。

小平　まづ、ござりませう。

　　ト唄に成り、順慶組み子の者へ顏にてきろ。皆々「はつ」と云ふて、橋懸かりへ入る。關の戸こなしあつて、順慶、小平太、附添ひ奥へ入る。ト采女、出て。

采女　もう／＼、御免々々。わが君の無理酒には、ほつと弱るぞ。

　　ト云ひ／＼、出て、合ひ方に成り、采女、あたりを見て、袂より最前の文を出し、讀むことあつて

こりや、コレ、急に身受けせうと云ふ客があると、おれへの知らせ。（トこなしあつて）外でよい事があるに依つて、おれをばのかうといふ氣か。よもやさうではあるまい。が、コウツ。どうしたものであらうぞ。

　　ト莨盆取つて來て、莨を喫んだり、又文を見たり、いろ／＼ある處へ、關菊、出て采女を見るより、ツカツカと行つて

関菊　采女さん、逢ひたかつたわいナア。

ト傍へ寄る。采女、彼方へ振り向く。関菊こなしあつて

関菊　定めしそれを見やしやんしたでござんせう。其事も相談したし、廓の首尾を見合せ、どうやらかうやら。

ト云ふを打ち消し

采女　コレ〳〵、長談議聞くには及ばぬ。そつちに身受けがあれば、此方は御用先き、相手になる隙がない。

ト立つて、行かうとする、裾を持ちて留め

関菊　イヽエ、わたしよりお前が。

采女　おれがどうした。

関菊　將軍家のお姫さんと、祝言する氣であらうがな。

采女　ヤア、その譯をどうして。

関菊　知らいでならうかいナア、モシ、采女さん、

ト采女を引き廻し、下に置く。キッパリとした合ひ方に變はる。関菊こなしあつて

今更言ふには及ばねど、わたしが身の上、母様は日の本のお生れなれど、高麗人に思はれて、わたしは、あの國で生れたれば、幼いからの唐土人。去年の秋、蔦の錦を手に入れんと、高麗へござんした時、ふつと見初めたは、母様の夢の告げ。割符を合す縁ぞと、喜ぶ甲斐のあることか、本意ない別れに身も世もあられず、跡を慕うて釜山浦の港に、有り合ふ船は天の與へ、浪に揺られ風を凌ぎ、生きる死ぬるのせつない苦しみ。その念が通つたやら、松浦の濱へ舟を揺り上げ、日の本の地へくるは來ても、何處をどうしての勝手は知らず、人を頼んで都へ上り、わたしが好んでかうした勤めの身になつたも、お前にま一度、めぐり逢ひたいばかりぢやわいナア。母様のお話して、倭の形も風俗も、習ふに早き傾城のこの姿。戀ひしい床しい念が届いて、廓で逢うたその時の、わたしが嬉しさ。三千餘里の海山を、戀ひ慕うた心根を、可愛い事ぢやと、思ひやつてはくれもせいで、わたしを振り捨て、外の奥様を持たうとは、そりや聞こえませぬ。胴慾ぢや、胴慾でござんすわいナア。

ト取り付き、大泣き。采女、こなしあつて

采女　イヤ、モウ、さう聞いては一句もない。高麗で逢うた時は、つい假初めのやうに思うてゐたが、歸朝の後、小田之助様のお供を申して、つと廓へ來る殿の遊興。この采女にも傾城を當てがへと、

其時の新造太夫、顔を見れば其方。悔りせまいか、驚くまいか、樣子を問へば段々の話しとは言へ、高麗と日の本、劍を含む仲なれば、どうも肌が許されぬと言うたれば、

園菊　僞りならぬ證據にと、お前に渡した、高麗の地理の一卷。

采女　其一卷は爰に（ト懷中より出して）高麗に於て、眞の蔦の錦と名付くるは、地理の一卷。拵への布を以て、蔦の錦と名付くる由。此度、帝樣より、五色の蔦を叡覽とある故、此一卷を差し添へ、大内へ持參せん爲。是れで其方への疑ひも晴れて。

園菊　それから深う言ひ交はし、鳥の啼かぬ日はあれど

采女　逢はぬ一夜のあらばこそ。廓で浮き名を立てられて、二人が仲を唄に作り、謠はれたではないかいの。

園菊　ほんにさうぢやわいナア。

ト采女、こなしあつて、園菊に凭れかゝり

采女　かう差し向ひになつた所は、揚げ屋の座敷で出逢ふ心地。

園菊　二人が仲を製らへた其唄を「唐土」と外題を附け、可愛らしい其唱歌。

采女　折しも其方の香包みに、唄の文句をおれが手で書きしるし、君が移り香、持ち歸らうと云うたれば

園菊　イエ〳〵、焚き物を送れば緣が切れるとの諺なれば、わたしが方にと留め置いた、其香包みは、コレ、爰に（ト香包みを出して見せる）。

采女　久し振りにて、ちよつと一焚き。

園菊　アイ。

ト内にて

〽中々に、見ぬ唐土の鳥は惜し、桐の葉がくれ、それかとよ、一葉は船の水馴棹、八重の汐路を辿り來て、ほんに思ひは伽羅の香を、別れはいつも懷かしき。

ト唄のうち采女、香盆を取り、火入れに灰をする。園菊、香を出し、いろ〳〵あつて、火入れに注ぐ。采女、香をきいて、園菊が方へやる。園菊、同じく香をきく。右唄の内に、この模樣、いろ〳〵あつて、唄の切れよき程に、向う戸屋の内より

呼び　信孝公のお入り。

ト云ふ。兩人驚き

采女　ナニ、わが君のお入り。此態を御覽あつてはいかゞ。園菊、さらば。

ト立つて行くを、園菊留め

園菊　コレイナ。まだ話さねばならぬ事もある。ツイ、ちやつと門前の茶店まで。

采女　イヤ〳〵、今日は大切の公用。（ト又行くを）

園菊　ツイ、ちやつとぢやわいナア。（ト又引ッ張る）。

采女　ハテ、サテ。

ト振り離して行くを

園菊　マア、ござんせいナア。

ト無理に引ッぱると、此内「いざや酒を酌まうよ」と「酒宴車」の合ひ方、笛、大鼓の鳴り物になる。と向うより三七郎信孝、元服、巻き立ての茶筅、廣袖の衣裳、羽織、丸絎の帶にて、大盃を持って駒下駄を履き、酒に醉ひし體。小姓二人、一人は信孝が太刀を持ち、一人は、長柄の銚子を持つ。其後より、上下の侍ひ、近習、大勢附き添ひ出る。花道にて、兩方行き逢ふ。信孝、ジッと園菊に目を着ける。園菊も見て

園菊　ヤア、お前は。

ト悔り。采女、園菊を引き廻し、圍ふ。

采女　わが君樣。

ト信孝、采女を睨む。是れに怖れて、采女、園菊を圍ひながら、ヂリ〳〵後へ戻る。信孝、附け廻して、本舞臺へくる。始終、右の鳴り物にて、各〻、並よく、シヤンと留る。鳴り物止んで、柔らかな合ひ方になり、信孝、こなしあつて

信孝　太夫園菊。

園菊　アイ。

采女　ムウ。すりや、わが君樣と

園菊　お近附きの段かいナア。わたしを身請けするというて、此頃廓へ通はしやんすは、あなたでござんすわいナア。

采女　すりや、アノ、わが君樣が、

ト信孝を見て思ひ入れ。信孝、園菊をヂロリと見遣るこなしつて

信孝　ハテ、羨ましい。當春廓でふと見初め、姿と云ひ、器量と云ひ、近習の者に言ひ附けて、名は何と問はせたれば、わしや園菊と云ふわいナと、膠ない顔付きに、ぞつこん惚れ拔いた。權威で逢

ふは面白からずと、供をも連れず只一人。戀ひには窶す忍び姿。呼びにやつても來ればこそ、文をやつてもいなやの返事致さぬは、かの間夫とやら云ふ似非者。その間夫とやら云ふは、采女、汝か。

采女　サア、其儀は。

信孝　太夫、予が心に從ふ氣か。

園菊　サア、それはナ。

信孝　但しは否か。

園菊　サア。否というなら

信孝　取持たす。

園菊　そりや、誰れにえ。

信孝　この采女に取持たす。

ト采女方へ行くを、園菊止めて

園菊　ア、、コレ、采女樣を。

信孝　抱かれて寢るか。

園菊　サア、アノ、つッと辛氣な。

信孝　ソレ〳〵、さう拗ねたのがしんぞ命、是非とも心に從うて。

ト園菊に抱き着かうとする。采女、園菊を下へ引廻し、眞中へ入る。

采女　わが君樣、見ますれば御酒興の態。よもや、御眞實でござるまい。酒の上のお戯れに。

信孝　默らう、此奴。醉ひ潰れても、本心亂るゝ信孝でない。

采女　すりや、御本心で。

信孝　口說き落して抱いて寢る。

采女　エヽ。(トぎしむ)。

信孝　何ぢや。何とした。

ト睨めつける。采女こなしあつて

采女　一夜流れの傾城とは言ひながら、言ひ交した緣は緣。現在御家來たるこの采女が、

信孝　緣切れ。

采女　エヽ。

信孝　緣切つて、予が心に靡くやう、取り持つが家來の役。

采女　ぢやと申して。

信孝　主命に背くか。

采女　サア、其儀は。

信孝　取り持つか。

采女　サア、

兩人　サア〳〵〳〵、

信孝　取り持たずば汝が身の上。いつそ

　　　ト小姓が持ちたる太刀を取つて、采女へ掛かる。園菊采女と入り代つて留め

園菊　アヽ、コレ。抱かれて寢よう。

采女　コレ、それでは。

園菊　サア、マア。わたし次第にしてナ。

　　　トいろ〳〵呑み込ます。信孝の方へ向うて

　　抱かれて寢るわいナア。

　　　ト信孝、和らぎし體にて、太刀を小姓に渡し

信孝　アノ、得心して、予が寢所(しんじよ)へ。

園菊　アイ、夕告げ鳥の告ぐるを合ひ圖に。

信孝　ムウ。今宵は當御所に一夜を明さう。僞りなくば宵の内から。

園菊　行くわいナア。

　　　ト采女腹立てる。園菊押へる。信孝、園菊の焚き捨ての香を、ふと聞き取る事あつて

信孝　ハテ、心得ぬ。この名香。(ト思ひ入れ)。

園菊　すがりなれどもわたしが焚き捨て。

信孝　この一本(ひともと)が。

園菊　アイ。

信孝　ムウ。

　　　ト思ひ入れあつて、懷中より香包みを出し、右火入れの中へ香を注ぎ、しか〴〵あつて

　　聞いて見やれ。

　　　ト園菊、香をきく。驚く體にて

園菊　香りも違はぬ、正(まさ)しき一本(ひともと)。

ト信孝を見る。信孝こなしあつて

信孝 「唐土(もろこし)の山の彼方(かなた)に立つ雲は、爰(こゝ)に焚く火の煙りなりけり。」

園菊 その歌をどうして。

信孝 先つ頃、高麗國より、父信長へ献じたる、「唐土(もろこし)」と名づけし名香。割符を合せし只今の一焚き。

園菊 エヽ。

信孝 サヽ、閨の下着にしつぽりと、抱(だ)き〆めてゐるぞや。

ト唄に成り、信孝、兩入へ心を殘し、矢張り未練の體にて、そろ〳〵奥へ入る。小姓、近習殘らず附添ひ入ると、此時、橋懸りより、帶刀、野袴羽織にて、侍ひ連れ、出掛け兩人を見て、侍ひを退け、ためらひゐろ、采女、園菊、こなしあつて

采女 思ひ掛けないわが君が、和女(そなた)への戀慕と云ひ。

園菊 香の割符にわたしが身の上。

采女 試(ため)さん爲の空言(そらごと)か。

園菊 但しは誠か。

采女 深い樣子を試した上の一(ひと)思案。園菊、おぢや。

ト園菊を連れ、行かうとする。帶刀、スツと出て

帶刀 女に迷ひ、忠義を忘れし、瀬川采女。

ト兩人恟り。采女帶刀を見て

采女 ヤア、こなたは兄者人。

ト園菊を退けて、下へくる。帶刀、眞中へ入る。

園菊 そんなら、あなたは。

帶刀 小田の家臣、小早川帶刀。北山巡見の歸るさ、今の有樣見聞致した。

采女 兄者人、此采女が忠義を忘れしとはな。

帶刀 賢を賢として色に易へよとは、聖賢の敎へ。幼少より、瀬川主計どのへ養子に遣はし、今、瀬川采女と名乘り、小田之助樣のお側の奉公。君には生得愚かしく渡らせ給ひ、附き添ふ輩(やから)が勸むる放埓、悪事千里と禁裏おもての上聞に達し、君の放埓は采女が勸むる處と、差し當る汝が悪名。それと知りつゝ御諫言も奉らず、共に亂るゝ惰弱の振舞ひ。其性根を以て、養父主計どのの名跡が立たうと思ふか。淫婦に迷うて忠義の道を、踏め迷うた空(うつ)け魂ひ。不義不忠の身を以て、よも武士道は立てられまい。

ト きつと言ふ。此時、臆病口より山九郎出掛け、こなしあり。采女、懷中より一卷を出して、帶刀が前に直し、こなしありて

采女 是れこそ高麗國地理の一卷。深い樣子は、それなる園菊。わが死後は御前へ申上げてたも。サア兄者人、采女をお手打ちに遊ばされませ。

帶刀 なんと。

采女 大內へ申し譯。小田之助樣、御放埓の根差しは、此采女と仰せ上げられ、此首を以て諸大名の疑念を散じ、若殿の汚名を雪いてだべ。サア。一時も早う。（ト覺悟の體）。

園菊 そんなら、お前は。

采女 長い未來で添ひませう。サア、兄者人。

ト 帶刀こなしあつて、柄に手を掛けて、立ち上がる。

園菊 コレ、モシ。

ト 留めるを引廻して

帶刀 不便(ふびん)なれども若殿の御爲、覺悟致セ。

ト 女を切らうとする。山九郎、スツと出て、帶刀を宜しく留める。

山九 イヤ〳〵、采女樣をお手打ちとは、餘り性急に見えまする。まづ〳〵待たせられませう。

ト 帶刀こなしあつて

帶刀 わりや新參の家來、金井山九郎とやら。

山九 陪臣たる私しが、差し出まするはいかゞはしうござれど、御大身たる、小早川帶刀樣、憚りながら、ちと御短慮かと存じまする。

帶刀 何と。

山九 小田之助樣の御放埓は、御身(おんみ)の生得。今采女樣をお手打ちあつたればとて、御本心にお成りなさるるでもござるまい。こゝは幾重にも御賢慮のあるべき事と存ずるから、慮外、無禮、お叱りをも顧みませず、かゝる仕合せでござりまする。

ト 帶刀、山九郎を見て、こなしあつて

帶刀 功もなく、手柄もなく、辯を以て小田家に取り入り、おのれが妹を以て白拍子と名づけ、色酒の二つに勸め込み、知行を貪る國賊同然。一つ穴の狐共、手打ち次第に、何處(どこ)へ刃金が廻らうも知れぬ。覺悟して待つてをらう。

ト 山九郎こなしあつて

山九　漢の武帝は賢王にて在せども、李夫人の別れを歎き、數日朝に出給はず、群臣是れを諫め奉ると雖も帝之れを用ひ給はず、中にも、李延峯が智謀の催し、唱歌の中に管絃を含み、九華帳にて李夫人の俤を承らせ、愛慾を斷ちしゆゑ、武帝忽ち御心を飜へされ、煩惱の雲霧を拂ひ、戀慕の思ひを留めさせ給ふとゞる。古への賢王さへ斯くの如し。ましてや末代。この山九郎、小田家の御恩を飽くまで蒙り、させる忠功はなくとも、御放埓を何故にお勸め申さん。拙者めは、皷亂舞の御指南。武道を以て、御諫言申さば、其職に非ずとあつて却つてお咎め蒙る。退去仕るに於ては、愈ゝ御酒宴に募り、御身の仇ともならんか。色に臨んで色を遠ざけ、酒を進めて酒亂を留める。臨機應變は軍の掛引きばかりにも非ず。諸道是れに依つて行ふ時は、全く利を得るものと、彼れ是れを存じて、わざと御諫言を申さねば、不義不忠とも思し召されんが、此儀に於てお咎めを蒙るとも聊かお恨みとは存じませぬ。お手打ちをとござらば、栄女樣より、先づ、金井山九郎め、牛裂き、八つ裂き、逆磔となるとも、成敗はお心任せ。サヽ、いかやうとも、お仕置きあられませう。

ト段々の言ひ譯を聞いて、帶刀、こなしあり。信雄、濱荻を連れて出掛けて

信雄　山九郎が忠義は、かねてより存じてをれば、必ずとも粗忽致すな。

濱荻　殿樣の御放埓はわたしから起つた事。兄さん。わたしを手に掛けて、お前の忠義を立てゝ下さんせいナア。

ト山九郎が傍へ寄り、覺悟の體。

山九　妹、出かした。小田の御恩を忘れぬと云ふ、山九郎が忠義の魂ひ。不便ながら、其方を手に掛け返す刀で身共が臟腑、引出だしてお目に懸ける。覺悟はよいか。

濱荻　南無阿彌陀佛。

ト山九耶、拔いて振り上げる。

帶刀　山九郎。待ちやれ。

山九　イヤ、拙者めが。

帶刀　手打ちに及ばぬ、疑ひ晴れた。

信雄　罪もない濱荻、聊示すな。待て〳〵。

ト山九耶、こなしあつて

山九　イヤ、其お疑ひが晴れたとござれば、拙者が滿足、此上はござりませぬ。

ト濱荻を信雄が傍へやり、其身は末座へ行つて控へる。

信雄　今日より禁酒して、改めうわいヤイ。
帯刀　すりや、御本心に。ハヽア、お出かしなされた。
園菊　此上は采女様へのお疑ひも。
信雄　晴れいてどうせう。ナア、帯刀。

ト帯刀、思ひ入れあつて、一卷を取り上げ

帯刀　高麗地理の一卷、五色の蔦に相添へ、二品とも大内へ持參しやれ。（ト采女に渡す。）
采女　相役、隼人どのに渡し、私しも同道仕りませう。

ト帯刀、懐中より、袋入りの印を出し

帯刀　是れこそ禁廷より、朝敵追討の印として、小田の館へ預る處の、獅子の御判。雌雄二つの内、去春雄獅子の方、紛失なし、相殘るは、この雌獅子の御判。御本心改まる上は、小田之助どの、イザお受取りあられませう。

ト御判を信雄に渡す。山九郎思ひ入れあり。

采女　雌雄の御判、片割れを盗み取り、殊には去年本能寺騒動の折柄、蛙聲丸の劍紛失。是れにつけても去年高麗にて聞き取りし一大事、三輪五郎左衞門様へ注進せしに、此儀、沙汰あつては、諸大名の心も區々（まちまち）ならん、先づ〳〵沙汰致すまじとの事。彼れ是れを思ひ廻せば、四海を望む反逆人の仕業。武智が餘類か、又は、今川義元が殘黨が、時を窺ふに相違はない。
帯刀　それゆゑ某、巡見と名附け、忍び〳〵に實の詮議。心得難きは、三七信孝公の御所存。もしや劍（つるぎ）を（トこなしあつて）是れとても證跡なければ、粗忽な儀も申されまい。
采女　幸ひこの園菊に心を懸けてござれば、信孝公の御本心
園菊　及ばずながら、試して見ませうわいナ。
帯刀　まつた某、此ところへ立ち寄りしは、先君御在世の砌り、當寺の境内五重の塔の二重目に、黄金千兩を込め置かれ、まさかの軍用と仰せ置かるゝ。是れを以て、此度在京の諸武士、軍功に依つて分ち與へよとある三老職の内意に依り、罷り越したる折に、幸ひ君の本心承り、安堵致してござる御判の片割れ、必ずともに御大切に遊ばされませう。
信雄　よし〳〵、滅多に失ひはせぬぞ。（ト御判を懐中する。）
帯刀　信孝公の御本心、探り見るは、園菊とやら。
園菊　合點でござんす。
帯刀　某は、歸館の用意。

濱荻　そんなら、殿樣。

園菊　采女も一しよに。

采女　然らば、兄者人。

帶刀　イザ、わが君。

信雄　サア、山九郎も來い。

山九　ハツ。

帶刀　まづ、入らせられませう。

ト唄に成り、信雄。濱荻を連れ、采女、園菊、附き添ひ帶刀、山九郎へ目を殘して、こなしあつて、皆々奥へ入る。山九郎は、矢張り末座に控えたるなりに、殘つてゐる。合ひ方になり、山九郎皆々の入つた後を見送り

山九　ウム。

ト手を組み、思案のこなし。ト此うち上の櫻の重の傍らへ黄なる胡蝶むらがる體。山九郎思案の內、ふと蝶の方とへ目を着ける。ト蝶、段々に分れて、友喰ひに戰ふ體。右の合ひ方何時ともなしに小凄うなり山九郎、こなしあつて

ムウ、むらがる胡蝶の羽色も變らず、花に集まり遊ぶにもあらず、おのれを先きに、我れを敗けじと喰ひ合ふ有樣。誠や、蜂蛙の戰ひは、時變に感じて間〻ある例(ためし)と、博物志にも之れを載する。今この體を考ふるに、當時、小田家爪の紋を用ふれど、正しく先祖は淸盛が嫡流、揭げ羽の蝶は傳はりし家の紋。信長亡びて信孝、信雄、又は三法師丸と、四海の跡目を爭ふは、取りも直さず、目前の蝶の戰ひ。黄蝶集つて戰ふ時は、國に變ある瑞相（モトノマヽ）とも言ひ傳ふ。（トこなしあつて）わが亡君は駿州の大守今川義元。さしも名高き名君たりしも、桶狹間の戰ひ敗れ、信長の爲に無念の御最期、われも戰場に討死すべかりしを、主君の仇、小田一類を恨みんと、其場を切り拔け、年月經つて、今、金井山九郎と變名し、遊藝を以て織田家に任官。われを今川の餘類とも知らず、傍らに附け置くは、自滅を招くと知らざる馬鹿者。去年六月、武智の謀叛に、信長、信忠、父子共に亡び失せ、光秀を又、久吉亡ぼす、兩虎挑んで取るの計略。三七信孝は氣品の猛將、四海を握るべき器(うつは)に非ず。小田之助は酒色に耽り、放埒者に仕立て置く。信忠が倅三法師丸。此(こ)奴(やつ)、捻り殺してしまへば、織田の一族、根を斷つて、葉を枯すの道理。今、蝶の戰ひは、時節こそ來つたと、わが亡君の導き給ふ知らせならん。數年の大願成就すべき時至つたか。ム丶丶丶丶。ハ丶丶丶丶丶。喜ばしやナア。心地よし、心地よし。

ト きつと言はうとして、あたりを見てかくし

ハレ心地よい。

ト笑みを含み、笑靨のこなし。此時、本釣り鐘にて、入り相を打つ。蝶、散亂する。山九郎立寄りて、こなしあると、橋懸かりより、昆侖奢、外國人くろすの拵へにて、窺ひ出で

昆侖 山九郎どの、これにござるか。

山九 外國渡海のくろす、彼地の樣子は、

昆侖 先達てこなたの荷擔人。宅間小平太どのを以て、高麗國へ送られし連判。韃靼、變を生じ、下知に從はずと雖も、高麗の照烈王、臣下とも異變なく御味方仕る證據。血判据ゑし、連判狀、持參致しましてござりまする。

ト一卷を差し出す。山九郎取り開き見て

山九 連判狀、慥かに受取つた。

昆侖 この黒すは、水練に妙を得たれば、日の中は海川に水底に住居して、夜に入ると、都を徘徊。隱す事でも聞き出すが黒ん坊の一德。

山九 其方は長崎黒岸の津へ立ち歸り、かねての手筈は、コリヤ。（ト囁く）。

昆侖 そんなら、この儘。

山九 早く行け。

昆侖 合點ぢや。

ト向うへ入る。始終、本釣り鐘。山九郎見送り

山九 ムウ。よし〳〵。

トこなしあり。橋懸かりより、鐵八出掛け

鐵八 お頭（かしら）。首尾は。

山九 只今帶刀が申せしは、獅子の御判、雌雄の内、片割れは紛失。其一つは雌獅子の御判、今小田元之助へ渡せしは幸ひ。是れも密かに奪ひ取り、一先づ本國駿河へ立退き、變を窺ひ、事を謀らん。又（また）五重の塔に黃金千兩、込め置きしと口走つたは、是れも幸ひ盜み取つて、軍用金。其方（そち）へも遣はす間、かねて語らふ手下の者に、配分致せ。

鐵八 すりや、五重の塔に黃金千兩

山九 其方（そち）は物蔭に忍んで、

鐵八 心得ました。

山九　拔かるな、鐵八。

鐵八　合點ぢや。

ト臆病口へ走りはひる。

山九　黄金と云ひ、時刻も屈竟。さうぢや。

トいろ／＼身拵へする事あつて、ツイと橋懸かり入る。釣り鐘、止む。トばた／＼にて隼人と小平太、蔦の箱と一卷とを、奪ひ合ひ、出る。

隼人　小平太どの。こりや何となさるゝ。

小平　五色の蔦、地理の一卷。二品（ふたしな）とも所望するのぢや。

隼人　何と。

小平　この手柄をせう爲に、去月高麗へ渡つて手に入れた、處を女郎めに橫取りせられ、心外でならなんだ。今見附けたは幸ひ、二色とも身共が大内へ差上げ、恩賞に與るのぢや。邪魔せずと渡せ。

隼人　さう聞けば、いよ／＼渡さぬ。

小平　洒落臭い老いぼれめ、受取つて見せう。

隼人　ならぬ。

小平　渡せ。

ト立廻りにて、二色共に取り落し、いろ／＼タテある所へ、櫻の木蔭より、照葉、ツカ／＼と出て、この中へ入る。兩人、是れはと寄る所を、左右へポン／＼と當て倒し、蔦の箱と、一卷を持ち、ツイと向うへ走り入る。兩人、心付き

隼人　うぬ、曲者。

ト追ひかけるうとする。小平太後（うしろ）へ切り倒し、すぐに乘り懸つて止めを刺す。ト音樂に成り、小平太拔り／＼向うを見て

小平　身共が手には入らずとも、あゝして置けば釆女が自滅。うまい／＼。

ト云ひ／＼扨り、落ちてある香包みを見て

此香包み（ト取り上げ見て）此歌は釆女が手蹟。狂うてをる女郎（めらう）めと云ふは唐で逢うたげんざいいゝ。其時の意趣、何もかも持ちこんで、蔦の紛失、老いぼれを殺したも、釆女に塗り附ける、證據はこの（ト香包みを見て）ムウ。よし／＼。

ト笑壷に入つたこなし。人音するゆゑ、中門の方へ、ツイへ走り入ると、臆病口より、喜藤次、千木姬

を連れ、出て

千本 コレ、〳〵何としやるぞいのう。

喜藤 こまごと云はずと、ござれ〳〵。

ト引ッ立てる。處へ、裏葉出て、喜藤次を支へ、千本姫を圍ひて

裏葉 狼藉な。お姫樣をどうするのぢやぞいナ。

喜藤 どうもせぬ。瀧川の御子息が、姫君に首ッたけ。密かに盗み出してくれいとのお頼み、邪魔せずと姫君を渡せ。

裏葉 さう聞いたら、愈〻渡されぬわいナ。

喜藤 面倒なげんさいめ。

ト裏葉を引きのけうとして、是れより品よき立廻り、いろ〳〵あつて、トゞ、喜藤次、千本姫を引ッ立てる。裏葉、ありあふ毛氈を取つて、喜藤次が頭へ被せて、引つ轉(こか)し、兩人して抱へ、帶に括(くゝ)り、突き飛ばして

裏葉 お姫樣、ござりませ。

ト千本姫を連れ、向うへ走り入る(はひる)。跡に、喜藤次、猫が紙袋を被つたやうな身振り、いろ〳〵あつて、毛氈を引き退け、向うへ追ひかけ入る。

始終音樂にて、返し。

右飾り附けの儘、築地、櫻の木共に東へ引き取ると、西より、五重の塔を引き出す。紋板、霞になり、塔の二重目迄見える體。櫻の木、東へ引き込むと、西より、塔に附いて櫻を引出す後方(うしろ)は築地の續き。すべて、初手よりは、花多くあるべし。右の塔の石段に、順禮、十作袞喫みゐる。五重の塔眞中へくる時分に、道具とまる。音樂は絶えずある。ト十作、こなしありつて

十作 ヤレ〳〵、歩いたぞ、歩いたぞ。イカサマ、よう思へば、今日(けふ)は餘ッ程の道であつたワイ。大津の宿を出て、朝ッぱらに清水の札を納めて、六角堂から、嵯峨のお釋迦樣へ詣つて、嵐山の花を見て、北山をくるりつと廻つて、打止めがこの御室(おむろ)。ナニが花は盛りなり、腹は時分なり、行李飯をした〻かにしてやつて、彼方此方(あちらこちら)と歩く内に、長の日を暮してのけた。カウツ。今日(けふ)は、ホウ宵闇ぢや。月の出る迄、マア、一服喫んで、三條迄ぼッついてくれう。ドレ〳〵。

ト舞臺先きへ出て、火打ちを出し、袞を喫む。暫くあると、塔の内より、拔き身出して振り廻す。十作悔りして、木蔭へ隱れる。ト正面の扉開くと、内より山九郞、頭巾冠り、凜々しき態にて、獅子の舛を咬

へ、黄金箱を抱へ、抜き身を提げ、キツト見得あつて、向うへ出て刀を納め、二品を見てニツコと笑ひ、

山九　雌獅子の御判、忝い。

ト戴いて、懐中する。臆病口より、濱荻、一腰にて出て、こなしあり。橋懸かりより、鐵八窺ひ出て

鐵八　お頭。

山九　鐵八。千兩の黄金、手下の者へ。（ト渡す）。

鐵八　そんなら、この儘。

山九　早く。

鐵八　合點ぢや。

ト金箱を持ち、向うへ走り入る。山九郎、こなしあつて、行かうとして、濱荻、向うに立ち塞がり

荻濱　兄さん、矢ツ張りお前は、惡人てあつたかいナア。

ト山九郎、こなしあつて

山九　大望の足手纏ひ。勘當だ。

ト濱荻を上へ引き廻し、行かうとする。

濱荻　イヤ〳〵、惡人と知つたら一寸も遁がさぬ。殿さんへの言ひ譯、いつそ。

ト抜いて、切つて懸かる。山九郎、懐劍を引取り、濱荻に切りつける。十作、ズツと出て組み附く。振り切つて行かうとする。立廻りあつて、十作を引廻し、ツカ〳〵と花道中程まで行く。

十作　曲者。

ト挙掛ける。山九郎、右の懐劍を打ち掛ける。十作、身を體す。此時、濱荻、立ち上がらうとする。途端懐劍當り、ウンと倒(に)ける。山九郎、向うへツイと入る。

南無三。ウヌ。

ト跡を慕ひ追ひかけ入る。後、仕掛けにて月出ると、奥の方より、信雄、木田平を引ツ張つて出る。

信雄　サア、一大事ぢや、一大事ぢや。

木田　一大事とは、何事てござりまする。

信雄　サア、其一大事と云ふはナ。とろ〳〵と假睡(まどろ)む内、帶刀が渡した、雌獅子の判を、誰れやら取つたわヤイ。

ト木田平、悔り

木田　ヤア〳〵、大切の御判。して、其盜賊の行くへは。

信雄　サア、何方(どつち)へ行つたやら。（トうろ〳〵する）。

木田　何にもせよ、遠くは行くまい。（ト駈け出さうとして、又、後へ戻り）何ぞ手掛りはござらぬかな。

信雄　イヤ〱、手掛りもない。

木田　すりや、手掛りもござらぬか。ホイ。

ト當惑する。濱荻、息を復す。兩人見て

信雄　ヤア、こりや。濱荻が切られてゐる。

木田　寔に濱荻様、こりや、コレ、急所の深手。

信雄　濱荻やアイ〱。

木田　濱荻様々々。

ト兩人呼び生ける。

濱荻　大切な雌獅子の御判を奪ひ取つたは、皆兄さんの惡心。

木田　すりや、山九郎が。（ト向うを見る）。

濱荻　其上、千兩の黄金迄、鉄八とやらが、持つて立退きましたわいナア。

木田　ヤア〱。

濱荻　もし、未來の御縁を待つてをりまするぞえ。

ト言ひさして死ぬる。

信雄　可愛いや、可愛いや。（ト大泣き）。

木田　コレ、泣いてゐる處でない。盗賊は、金井山九郎。ござれ。

ト信雄を連れ、行かうとする所へ、紅梅組みの組み子、バラ〱と出て

組子一同　動くな。

木田　何ひろぐのだ。

組〇　放埒者の小田之助を、引ッ立て參れと順慶様の言ひ附け。

組☒　下郎ぐるめに引ッ立てるのぢや。

皆々　早くうせう。

木田　ハヽヽヽヽヽ。小癪な青蠅め等。若殿に附添ふ奴は、剛鉄の楯よりまだ〱丈夫なワ。寄りやアがると、片ッ端からお小豆粥だぞ。

組子　面倒な。ソリヤ。

ト掛かる。一々取つて投げ

木田　若旦那、構はずと、早う、早う。

信雄　合點ぢや。合點ぢや。

ト橋懸りへ走り入る。皆々、立廻つて、「ドッコイ」と見得に成る。是れより跳への鳴り物になる。華やかなタテ色々あつて、皆々、逃ぐるを、木田平、追うて入る。チョン〳〵にて返し。

同じく飾り附けの儘、又、東の方へ引く。矢張り、築地の續きにて、五重の塔、櫻と共に、東へ引き込むと、西の方より櫻の馬場を引出す。後方は、一面の築地。前は櫻の林になる。道具納まると、又音樂になる。

トメタ〳〵にて、橋懸りより、歩左衞門、黒羽二重、麻上下、若侍ひの拵へ、高股立ちを取り、白木の文箱を持つて、氣の急く見得にて出る。臆病口より小谷、是れも氣の急く體にて出掛け、兩方、行き逢ひ、摺れ違うて、行かうとする。小谷、歩左衞門を見て

小谷　歩左衞門ぢやないか。

歩左　姉者人でござるか。

小谷　オヽ、矢ッ張りさうぢや。弟ぢや〳〵。五六年も逢はぬうち、テモ、マア肥滿して、よい男になりやつたなう。

歩左　こなたも堅固て、何より大慶。して、親仁樣には、只今に於て。

小谷　氣儘ばつかり仰つしやつてござるわいなう。

歩左　さやうござらう。久々御疎遠に打過ぎましたは。御用繁多によつて、寸暇を得ませず、思はざる御無沙汰。今日とても公用でござれば、機會を以て、便宜仕らう。まづおさらばでざる。（ト行かうとする。）

小谷　歩左衞門、待ちや。

歩左　イヤ、御用先きでござれば。（ト又行かうとする。）

小谷　不孝者、待て。

トキッと言ふ。歩左衞門、立ち留まつて

歩左　なんと。

小谷　歩左衞門（ト歩左衞門の胸倉を持つて、下に坐らせ、其身も下にゐて）エヽ、其方はナウ。わしや何ぢや、現在、其方の姉者てないか。父樣、母樣は、由緒ある家筋なれど、今は越後國、入方村といふ所に、浪人のお住ひ。其方は少さいから力も強く、苟にも腕立て。遠國邊鄙に朽ち果てんより、奉公を稼ぎますと、上方へ登りやつた跡、緣てがな、言ひ交した庄助殿と云ふ、わしが夫、

お大名のお鷹匠と聞いたばかり。身には深い望みがあるとて、わしを置き去りにして飽かぬ別れ。月日が經てば懐かしさも、幸ひ其方が上方にゐやる樣子を聞いて、夫の行くへを尋ねてたもと、狀(じやう)文の便りしたは、幾度と云ふ事はないぞや。遂に一度の返事もせず、其後聞けばお大名樣へ有り附きやつたとやら。さういふ事なら、何故便りをしやらぬ。各々の勝手ばかりを構うて、此姉の事も、父(とゝ)さんの事も、母(かゝ)さんの事も思ひやらぬぞ。其方を不孝者と言うたが誤りか。忠義々々と思ひやつても、孝が立たねば武士ではない。エヽ、其方は酷(むご)い氣な人ぢやノウ。

ト泣いて言ふ。歩左衞門、こなしあつて

歩左　成る程、お恨みの段々、至極仕つた。拙者が國元を出ましたも、親仁樣の我が儘、氣儘、もう御異見にも盡き果てまして、國を立ち退き、一先(ひとま)づ上方を稼ぎ、親々の家名をも引き興さんが爲、只今にては小田家へ仕官仕り、母方の河田を以て、河田歩左衞門と名乘り、段々とのお取立て。又庄助どのの儀も、心を着け、相尋ねますれど、いくらもあるお大名の中、お鷹匠とばかりでは、一向雲を攫むやうな儀でござる。然し幸ひなる事は、此度先君の御追福とあつて、京都には柴田どの、旅館を設(しつ)らへ、御燒香の儀なれば、諸國の大名、殘らず御參勤でござる。矢張りお鷹匠でござるか、又は、外體(ほかてい)の身でもござらうか、拙者も相尋ねませうから、こなたにも、御旅館へお出でなされ、とくとお尋ねなされたがよくござる。

ト小谷、是れを聞き、思案して

小谷　ほんにさうぢやわいの。其思案がいつちよい。シタガ、歩左衞門、わしが腹の立つまかせに、今の樣な惡口を。

歩左　アヽ、イヤ、拙者めは火急な用先き。

小谷　ほんにわしも心急けば。

歩左　今出川、柴田の御旅館、(ト差添へを取つて) 夜陰と申し、路次の用心。

ト遣る。小谷取つて

小谷　歩左衞門。さらば。

ト差添へをだかへ、向うへ走り入る。歩左衞門、具送り、こなしあつて

歩左　女儀のお心では、あゝありさうな事。(ト思ひ入れあつて) イヤ、殊の外の延引。

ト行かうとする。臆病口より、帶刀、出掛けゐて

帶刀　歩左衞門。

歩左　帶刀樣。安土(あづち)御殿より書面到來。

帶刀　ドレ。（ト文箱を取り、狀を出し、讀んで）ムウ。先君恩顧の諸大名、段々、後日迄に、今出川の旅館へ參集致すべき旨。其節に至り計ふべき旨、久吉どのより內意の文體。（トこなしあつて）步左衞門

步左　ハツ。

帶刀　其方事は、力量、百人に勝れ、陪臣ながら忠義一心の者と、久吉どのの眼識を以て、幼君三法師君を守護の役目。家督定めは四海の安危。おのれ〳〵が我意に募つて、血脈たる幼君をもしや（ト切る眞似をして）油斷のならぬ時節ぢやぞよ。

ト步左衞門、こなしあつて

步左　ハツ。委細承知仕る。

ト帶刀、懷中より、密書を取り出し

帶刀　期に及んで計るべき密計。勢州表に久吉どの陣代として罷り在る、福島左衞門どのへ申し送る密事、大切の使ひ。ハテ、誰れをがな。

ト步左衞門、思ひ入れあつて

步左　帶刀樣、密計とござらば、餘人は遣はされまい、苦しからずば、拙者めが。

帶刀　其方が參るか。

步左　一晝夜を駈けるならば、明々後日までには、屹度京着仕るでござらう。

帶刀　尤も（ト密書を右の文箱へ入れ）一刻も早く。

ト渡す。步左衞門取つて

步左　畏つてござりまする。

帶刀　四海の跡目、立てるか立てぬかは薄紙一重。御譜代といふにはあらねど、一心を見拔きし其方、此後とても

步左　比干は胸を裂かれ、屈原は汨羅に沈む。一命有らん限りは。

帶刀　もうよい。行きやれ。

步左　おさらば。

ト文箱を持つて、向うへ走り入る。帶刀、こなしあつて、臆病口へ入る。返し。

見附けの櫻、左右へ分れる。築地、觀音開きにて、兩方へ開く。向うより、結構なる御殿を突き出す。簾、一面におろしあり。櫻の釣り枝は、矢張りあるべし。すべて此一場は、御室の內奧御殿の體なり。音樂にて、道具は納まる。

ト御簾、一面に揚がる。向う、金襖。この眞中に、信孝、結構なる襖の上に、脇息に凭れ、前に大盃直しあり、上の方に、園菊、長柄の銚子を持ち、酌してゐる見得。小姓二人、兩方の隅に控へる。方々に銀燭臺、數多點しある。音樂止んで、柔らかなる合ひ方に成り

園菊　マア一獻おあがり遊ばせいなア。

信孝　イヤ〳〵、もうよしに致さう。置きやれ。太夫、いよ〳〵予が申す事を聞き入れて

園菊　アイ、暮れを合ひ圖に忍ばうと、約束をしたに依つて

信孝　それで此ところへ。

園菊　アイ。

信孝　イヽヤ、呑み込めぬ。予に靡いては采女に濟むまい。

園菊　逢ふは別れの始めとやら、變るは勤めの習ひぢやわいナア。

信孝　すりや眞實で。

園菊　抱かれて寢よう。

信孝　寢所の伽を。

園菊　サア、寢ようは寢ようけれど、それよりは、マア、この

ト信孝が膝元の太刀に手を掛ける。

信孝　何をする。

園菊　サア、これはナ。(トこなしあつて)餘りお疑ひなさるに依つて、心中を見せようと思うて。

信孝　ハヽヽヽヽ。もう疑ひは解けてあるのに。

園菊　イヽエ、表面に解けぬあなたの本心。

信孝　ヤ。

園菊　それ故にこの太刀を。

ト又取らうとする。信孝、園菊を下へ引き廻し、スツと立つて

信孝　予が帶劍に手を掛くるは、尾籠の女奴、眞ツ二つに。

ト太刀に手を掛ける。采女出て、信孝を品よく留る。

采女　まづ〳〵、待たせられませう。

信孝　采女。

采女　ハツ。

信孝　無禮の女め、手打ちに致すを、なぜ妨げなす。

采女　妨げは致しませぬ。申さば女、餘りの御短慮。

信孝　短慮とは、何が短慮。コリヤ、何が汝が狂うた女と思ひ、庇ふのぢやな。

采女　全くさうでは

信孝　二才奴、退かう。

ト采女を引き退け、園菊を切らうとする。小姓、出て

小姓　わが君、暫らく。

ト留めようとする。信孝、拔打ちにポンと切る。是を見て、一人　小姓、立たうとして、チヤッと下にゐる。兩人恟りして慄へる。

信孝　背かば忽ち斯くの通り。

ト血刀を園菊が眼先きへ突きつける。園菊、思案を極めし體になりて

園菊　お氣に染まずはどうなりと。

信孝　ムウ。

ト振り上ぐる。此時、帶刀出て、ヅッと園菊を下舞臺へ落す。信孝、行かうとするを、帶刀、隔て、信孝が刀の血を服紗にて拭ひ、ヂッと見る。双方氣味合ひあづて

信孝　帶刀、

帶刀　ハッ。

信孝　信孝が帶劍をとくと見たか。

帶刀　この、お太刀は。

信孝　蛙聲丸ではないぞよ。

帶刀　ハッ。

ト思ひ入れ。信孝、振り放す。小姓、鞘を取つて差出す。信孝、シヤンと納める。

采女　すりや、御劍は

帶刀　まさしく外に。

ト三人、顏見合せ、こなし。

信孝　國に盜賊、家に鼠。去ぬる六月、本能寺落去の折柄、紛失なしたる蛙聲丸。

トこなしあつて、下にゐる。

帶刀　さるに依つて、忍び〳〵に劍の詮議。恐れながら御前には、先君信長公の御氣性を受け繼ぎ、生得勇猛に在し、四海掌握の御心あつて、もしや劍を。サア、愚案を以て拙者めが計らひ。

采女　それ故、園菊に申し付け、君の御本心。
園菊　心に思はぬ戀ひの手管も
采女
園菊　皆、わが君の（ト信孝を見る。）
信孝　本心は酒。（ト大盃を取つて）注げ。

ト小姓、酌する。信孝、飲まうとする。

帶刀　待つた、わが君。儀狄が作る美酒は、禹王の口に苦し。酒池肉林は亂の基（もとゐ）。
信孝　イヽヤ、この信孝は、日本の大鵬、六十餘州も唯一呑み。（トぐつと酒を呑み干し）斯くの通りさ。

ト此時、木田平、バタ〳〵にて走り出て

木田　申し上げまする。御近習、金井山九郎、雌獅子の御判、黄金千兩、奪ひ取り、何處（いづく）ともなく立ち退きましてござりまする。
帶刀　ナニ、雌獅子の御判、千兩の黄金とも
采女　金井山九郎が。
木田　彼れが手下と相見え、鐵八とやらんに黄金を渡し、兩人とも立退いてござります。目當てなければ、ぼッ駈けん事も叶ひ難く、先づ御注進と存じ、立歸つてござりまする。

ト信孝、生醉ひの態にて、思ひ入れある。

采女　何にもせよ、草を分かつて。木田平、續け。
木田　ハツ。

ト兩人、駈け出さうとする。此時、正面の襖より、關の戸、衣裳、襦袢に改め、出る。臆病口の下より、順慶、小平太、橋懸かりより、喜藤治、軍藏、伴作、其外、諸士、バラ〳〵と出て

小平　釆女に繩打ちやれ。
喜、軍
伴、　腕廻はせ。

ト采女へ掛る。木田平、立廻つて

木田　御主人に指でもさすと、何奴此奴（どいつこいつ）の用捨はないぞ。
順慶　瀧川の奥方、關の戸どの、此場の樣子。
關戸　殘らず聞きました。

ト信孝、醉うたる態にて眠る。

帶刀　すりや、こなた樣は。

關戸　夫、將監は禁裡在番。關白家より、信孝、信雄が行跡を、糺せよと、御内意を蒙つて、わざと自らを差し越されしは、此實否を探らん爲。

采女　この采女には何科(とが)あつて。

順慶　言ふな、采女。帝の叡覽に備ふべき、蔦の錦は何處(いづく)へやつた。

采女　サア、其儀に付き、先き程より長井隼人どのを。

喜藤　隼人はお身が手に掛け殺さうがな。

采女　何と。

小平　證據と言ふは、この香包み。（ト出して）其方(そち)が手跡の此歌。隼人を殺した死骸の側に、落ち散りあつたが慥かな證據。

采女　すりや、隼人どのを殺(あや)めし死骸の側に

小平　香包みはどうしてあつた。

采女　サア、其儀は。

順慶　蔦の錦はどれへやつた。

采女　サア、それは。

喜、軍伴　縄打(ぶ)つて詮議せうか。

采女　サア、

小平　言ひ譯があるか。

采女　サア、

采女皆々　サア、サア〳〵。

皆々　何とぢや。

帶刀　采女、それへ出い。

采女　ハツ。

帶刀　大切なる蔦の錦。殊には隼人殿の横死。證據を以て詮議、押し默つてをつて事が濟まうか。申し譯あらば明白に致せ。采女、返答せい。どうぢや。

　　トきつと言ふ。采女いろ〳〵あつて

采女　ハア、。

　　ト泣く。園菊、取付き

園菊　モシ、采女樣、言ひ譯はござんせんかいナア。

小平　女郎め、身共を忘れはせまい。うぬ、詮議のある奴。侍ひ衆、次ぎの間へ引き立てさつしやれ。

侍ひ　立たッしやれ。

園菊　イヤ／＼、なんぼうでも離りやせぬ、離りやせぬ。

侍ひ　ハテサテ、立たうてや。

ト無理に引き立て。橋懸かりへ入る。

木田　御主人の申し譯に、其盗賊め。天地を穿つて、さうだ。(ト血相して駈け出す)。

帶刀　木田平、待て。

木田　イヤ、盗賊めを。

帶刀　尋ねに參る目當てがあるか。

木田　イヤ、其儀は。

帶刀　御判といひ、黄金といひ、亭がせを亂せし今となつて、何處を目當て、誰れを詮議。四海の大變狼狽へる處でない。待てと言はば、マァ／＼待て。

木田　エヽ、。

ト向うを見て、拳を握り、是非なく元の處へ戻る。信孝、始終眠つてゐる心意氣あり。

關戸　此騷動に小田之助どのは、どれにござるな。

小平　誠に。何れも若殿の在所を尋ね、此處へ引ッ立てさつしやれ。

喜、軍、伴　心得ました。

ト立上がると、向う戸屋の內より

三輪　待つた、いづれも。三輪五郎左衞門、若殿を同道致いた。待ちやれ、待ちやれ。

順慶　ナニ、五郎左衞門が。

小平　若殿も引ッ立てやれ。

喜、軍、伴　ハッ。

ト早き太鼓、謠ひになる。三人向うへ駈け出す。ト向うより三輪五郎左衞門、七十計りの親仁、赤顔、白髮の鎌髯、岩疊作りの袴へ、着附け上下に僞物作りの大小にて、信雄が手を持つて引ッ立て出る。花道にて、先きに立つた喜藤治を蹴り退け、入り代り、又、軍藏を後へ張り飛ばして入り代り、續いて伴作を蹴り倒し、段に入り代つて、ノサ／＼と本舞臺へくる。三人、附いて來て、おこづく。五郎左衞門、振り返りて睨む。三人、氣を呑まれて、後へ寄る。太鼓、謠ひ打上げる。五郎左衞門座席を見渡し

五郎　ホヽヽ、こりやァ、態々のお入りだわ。聞いてくりやれ。此うつけ殿がヤンチャ起いて、安土御

殿へ歸らぬ。爺がお迎へに參つた。只今御門前で出逢つた處、何か此和郎に詮議の有る體。何とせう掛り合ひだと思つて、引ッ立て參つた。和子、其處へ出さつしやい。

ト信雄を眞中へ突き据ゑる。

信雄　コレ帶刀、其方から受け取つた、獅子の御判を取られて仕舞うたわい。其上、濱荻が殺された可哀い事をしたわいヤイ。

ト泣く。帶刀こなしあり。

關戸　聞き及んだ、小田の老臣、三輪五郎左衞門高秀どのぢやな。

順慶　三輪氏には、夜陰といひ

小平　殊には御老體。

喜、軍伴　御苦勞に存じまする。

帶刀　信孝公にもお渡りでござれば、高秀どの、サヽ、是れへ〳〵。

五郎　構やるな。ゐたい處にゐる。（ト下舞臺の眞中へ坐る。）

帶刀　さやうでござらぬ。貴殿と久吉どの、柴田どのは、小田の三老職、殊に貴殿は、信雄公の後見、各々方出席の折柄、座席に甲乙がござつては

順慶　成る程〳〵。此順慶、十二萬石の大名、三輪氏は無祿なれども、御前の羽振り、威勢の段は、何として〳〵。サヽヽ、上座あられませう。お手を取りませうかな。

五郎　アヽ、やかましいわい。年寄りは、尻が重たいから、座つた處で動きはせぬ。尤も我れら年積つて、七十六歳、先君、信長公のまへつぶりより、嫡男、城之助どのに仕へ、今此和郎の後見と、三代の奉公。國を取らず、祿を受けず、氣儘腕白に暮らすから、諸大名の理窟臭いが、虫に障つてムンム〳〵と胸が悪い。（トじろ〳〵と其處邊を見廻し、順慶を見て）、坊主、赤い形だな。しつかい梅漬けの酸漿だわ。（ト順慶、ムッとする。又、小平太を見て）わりや、宅間玄番の弟、小平太だな。面癖のわるい人相だわい。

ト小平太、脇見する。又、關の戸の方や、帶刀の方、橋懸りの方を見たりして

エヽ何れを見ても、マジ〳〵マジ〳〵と、理窟臭い洒ッ面。是れにつけても、先君が存命の内から、牛の睾丸が三つ欲しかつたわい。

喜藤　ナニ、牛の睾丸が

軍藏、作伴　三つ欲しいとは。

小平　牛の睾丸があつたら、何に召さるゝ。

五郎　されば、牛の寧丸が三つあつたら、一つをば久吉に頰張らせ、又、一つをば、しやッむづかしい柴田めに頰ばらせ、相殘つた一つをば、穀潰しの大名共に、知行をくれて置く信長公に頰ばらしてくれたかつた。ハ、、、。

帶刀　ナニサマ、三輪氏は先君の寵臣。御在世の節より、出仕登城も勝手たるべしとの事。只今の冗談も畢竟、諸大名の我慢、偏執の魂ひを取り拉ぐの名言。帶刀に於て感心仕つてござる。

關戸　して、高秀どのには、此場の騷動？

五郎　承つた。

小平　蔦の錦、此獅子の御判、千兩の紛失は、安からぬ四海の騷動。

喜藤　落ちつきも時に依る。

小平　此場の詮議は

皆々　何とでござるな。

五郎　去年、雄獅子の御判、蛙聲丸紛失。又ぞろや今日、二品三品の無くなつたは、盜んだ奴より、盜まれたが馬鹿の天上。今となつて狼狽へ眼。役にも立たぬ詮議呼はり、腹減らしに入らん事だ。取卸さッしやい。

順慶　すりや、詮議もせず、此儘に。

五郎　イヤ、捨てちや置かぬ。

小平　して、其詮議は。

五郎　明々後日は、今出川の柴田が旅館へ、諸大名の會合。此所で評議を極め、先君御追福の燒香も相濟んで、家督定めの時節迄に、何もかも尋ね出し、事を無難に納めて見せるわ。

關戸　イヽヤ、呑み込めぬ。か程の事を仕出かす曲者、家督定めの時節迄に、もし寶の揃はずば。

五郎　楚國には、寶を以て寶とせず、仁を以て寶とする、まッその如く、仁を以て國を治め、智を以て詮議せば、遲いか、早いか、六十餘州は將軍の懷ろ同然。瀧川の御內儀、餘り嫉かつしやるな。日和見の順慶も、よい加減に默りやれさ。

小平　ナニ、順慶樣を

三人　日和見とは。

五郎　日和見の因緣曰くを知らぬか。知らずば言つて聞かさう。筒井順慶、先君の御高恩を蒙りながら、光秀が謀叛に賴まれ、本國より八幡山まで出張せしを、天王山の旗色變り、久吉勝軍と見るより、又候や身方に加はり、何食はぬ顏で小田に奉公。今御家督の評議となつて、信孝公の機嫌

を取り、此信雄どのに追從輕薄。幼少なる三法師君に取り入り三方四方へ諂ふは、何れが四海の主となりても、汝が知行を取り外すまいと云ふ勝手料簡。其方よ此方よと日和を見て、暮らすに依りて、其處で日和見の順慶、なんと解つたか。

ト順慶、脇見をしたり、いろ〳〵眞面目になる。

喜、軍
伴 御尤もに存じまする。

帶刀 順慶どの、流石でござる。日和見の御巧者を以て、手も濡らさず、十二萬石。拙者もちと、日和の見やうを御傳授下されい。ハヽヽヽ。ハテ、よい異名を附けさつしやれたな。

五郎 宅間小平太、われが兄は、柴田の出頭、鬼玄番と異名を言ふが、其弟のわれにも異名がある。先づわれが異名を云ふは

小平 アヽ、コレサ〳〵、もう異名話しは聞かいでもよくござる。お止めなさい〳〵。

五郎 でも、彼奴らが聞きたがるわサ。

小平 サア〳〵よくござる。何の向うでも、問はいでもの事を。もう〳〵〳〵、よくござるわいの。

木田 イヤ〳〵、小平太樣。五郎左衞門が異名のお話し、下郎めも聞きたくござるから、こりやお聞きなされたがよくござる。

小平 默れ、下郎めら、奴が差し出る處でない、すッ込んでをらうぞ。

帶刀 イヤ、小平太、さうでない。斯樣の事は、武士たる者は後學にもなる事ぢや。小平太が異名は何とか申す。三輪氏、どうでござる〳〵。

ト小平太眞面目になりて

小平 アヽ、さりとては帶刀樣、もうよくござるわいの。根問ひ葉問ひをすると、跡では屑の出るものぢやっノウ、何れも。ハヽヽヽ。イヤ、モウ、五郎左衞門樣の儀は、昔にも變らぬ御氣丈。先君信長公、御在生の砌りは、君の馬前に數ヶ所の功名。終に一度の後れを取らず、鎗は寶藏院流の奧儀を究め、馬藝に於ては大坪流の達人。古今獨步と言はうか。ハレ、ヤレ、惜しい者が年寄つたわい。ハヽヽヽ。イヤ、お羨ましうござる。なんと、何れも左樣ではござらぬか。

ト我が事を言はれまいと、いろ〳〵追從らしう言ふ。

喜藤 左樣々々。五郎左衞門樣は、大坪流の馬藝の達人。そこで、大坪流の五郎左衞門樣、大坪流々々々と申すぢや。

軍藏 何樣、大坪流のお馬名は

伴作 日本は隱れがござらぬ。

喜伴、軍 ハヽヽヽヽ。

關戸 女ながらも自らは、記錄所の目附け役。寶の紛失、此場のしだら、其儘にして歸りしと、立ち歸つて申されうか。失ひしは誰れにもせよ。四海の跡目が卽ち科人。

帶刀 御兩君は信長公の御公達。三法師君は城之助どのの嫡男。いづれを四海の跡目たらん。諸大名の評議區々。高秀どの、其許の所存は如何でござるな。

三輪 余人は知らず、此和郞は、身が後見。連れ歸つて、杖棒の折檻、根性を撓め直し、しよう拔け病を直いた上で、家督に立てるとも、立てぬとも、そりやこの爺が胸にある。

關戸 して、これなる信孝公は。

帶刀 御後見たる柴田勝重、所勢とあつて、此場所にござらねば、此場の落着、

順慶 信孝公の

皆々 納まりは。

ト信孝を見る。此時、信孝、顏を上げ

信孝 追放。

皆々 なんと。

ト信孝、居直り、こなしあつて

信孝 六十餘州に望みはない。父信長薨去の後は、おの〳〵が威勢に募り、我れ一天四海の補佐にならうと、一心に針を含み、他人は元より、父子兄弟に至る迄、際限なき蝸牛の爭ひ。三七信孝、此世になくばと、余を欝陶しく思ふ輩もあらう。とあつて余に向つて、指差し手差しは猶えいせまい。其處を察して、其方達が身の立つやうに、誰れ彼れの指圖を受けず、信孝が覺悟は、信孝が追放する。

ト太刀を持つてスツと立上がる。五郞左衞門、思ひ入れ。

帶刀 アヽ、イヤ、さやうござつては四海動亂の基。此儀は暫く。

信孝 帶刀、留めるな。かう言ひ出したら、ふるなが辯舌で異見しても、いつかな止まらぬ。今月の今日より三七信孝、日本國を氣儘の往來。ハヽヽヽ、ハテ、面白い境涯ぢやな。

ト采女、五郞左衞門が袂を引き、信孝を留めぬかと云ふこなし。五郞左衞門、采女を顏にて叱り、默つてゐる。帶刀、信孝の顏を見て、こなしあり。

帶刀 日頃の御氣性よもお留まりは。（トこなしあつて、小姓を招き）近習の面々、信孝公に附き添ひ、守護されよと言へ、早う〳〵。

小姓　ハツ。（ト入る。）

小平　喜藤治、軍藏、伴作、お身達もお供に附添ひ、あはよくば途中に於てな。（ト切る眞似をして呑み込ませ）合點な。

喜、軍、伴　心得ました。

ト上下を取つて着流しになる。此内、近習三人出る。帶刀、こなしあつて

帶刀　いづれも我が君の警固、萬事に就き油斷なきやうな。（ト紗紗包みの金を拋り）守護致されてよからう。

ト近習、金の包みを取つて

近習三人　畏つてござりまする。

ト此うち、信孝座席を見廻す事あつて、五郎左衞門を見やり

信孝　爺よ、余が潔白。政道、批判があるか。

ト五郎左衞門、思ひ入れあつて

五郎　御道理に存じまする。

信孝　ドリヤ。

ト合ひ方になり、信孝、太刀を提げ、ノサ〳〵と花道の方へ行く。

五郎　三七君。待つた。

ト信孝、振り返り

信孝　用があるか。

五郎　猛虎深山にある時は、百獸是れが爲に慄ひ戰く。もし誤つて里に出づれば、尾を打振つて食を求む。深山に在つて其威勢强からんか。里に出て其威勢衰へんか。御賢慮如何でござるな。

ト信孝、こなしあつて

信孝　秦の始皇帝、奢りをなせしも、驪山の塚に埋もれ、漢の武帝の命を惜しむも、とりやうの苔に朽ち果つる。生者必衰、是非に及ばぬ。

五郎　して、御在所は。

信孝　行き着き次第、天竺浪人。

五郎　愈々四海に望みはないか。

信孝　「櫻木を碎きて見れば色もなし、香りは春の空にこそあれ。」

五郎　ムウ、ハテ。（ト感心の思ひ入れあつて）五郎左衞門、承知致した。

信孝　爺よ、さらば。

ト頬にて切る。唄になり、信孝、ノサ〳〵と向うへ入る。喜藤治、軍藏、附いて入る。采女、信雄、こなしあつて

采女
信雄　さうぢや。

ト一時に切腹せうとする、五郎左衞門、眞中にて兩方を留め

五郎　和子、待たつしやれ。采女、待ちやれ。

采女　蔦の錦の盗まれし申し譯。

信雄　濱荻に別れて生きてゐる心はない。

五郎　默らつしやい。さう云ふたわけを盡すによつて、寄つて掛つて馬鹿にするわい。

采女　申し譯は拙者が、

五郎　犬死して功になるか。

采女
信雄　それぢやというて。

五郎　それ〳〵、さう云ふ他愛なしに仕込んだ女郎め、死つたは物怪の幸ひ、何故性根を入れ替へ、彼こそ小田の公達、夫晴れ名君よ、賢君よと敬はるゝ氣はないか。和子は和子とも思はうが、采女、如何に若いというて、何故一命を全うし、蔦の行くへを詮議して、洒ッ面を雪がうといふ所存はないか。死は安し、生は難し。掛け替へのない命一つ、今死らうとは、若い〳〵。急く場でない。何事も爺に任して、和子、采女、待ちやと云はゞ、マア〳〵、待ちやれ〳〵。

ト左右へ突き放す。

小平　イヽヤ、若殿は格別。采女が科は免れぬ〳〵。覺悟の切腹、身共が介錯。

ト采女目掛けて行く。五郎左衞門、小平太を引き廻して、ポンと當てる。是れをキツカケに、内にてドンチヤンの打込み。

大勢　エイ〳〵。オー〳〵。

ト鬨の聲揚がる。皆々悔り。

關戸
順慶　ヤヽ、あの貝鐘は。

五郎　小山に埋伏せし反逆一味の、川尻肥後守を討ち取つた、勝鬨の引き鐘、太鼓だワイ。

順慶　ヤヽヽヽ。（ト悔り）。

帶刀　反逆人を見出さん爲、高秀どのと申し合せ、密事を探りし間者の方々、何れもこれへ。

ト橋懸かりより

瀧野　ハア。

ト又エイ〳〵ツ、ワーツと勝鬨を揚ぐ。瀧野、衣裳、裲襠に改め、小一郎、小手脚當てにて、切り首を持ち、半切れの軍兵、大勢、小田の赤旗を押し立て、出る。順慶、瀧野を見て悔り。關の戸も驚き

關戸　ヤア、そちや最前の

ト立たうとする。帶刀、目を着けるゆゑ、ヂツと納まる。

瀧野　開田太郎が女房と名乘りしわれは、お局頭、木幡といふ者。山路が白狀の上、聞き取つた密事の段々。

小一　某が手勢を以て、小山を取り圍ませ、

瀧野　一味の者を討ち取りしといふ、知らせの勝鬨。

小一　肥後守は斯くの通り。（ト討さ首を見せる）。

順慶　ヤア〳〵〳〵。（ト大悔り）。

帶刀　高秀どのの御計略、圖に當り、天晴れ〳〵。

五郎　反逆の張本は筒井順慶、遁がれはあるまい。

帶刀　尋常に切腹するか。

木田　但し抑へて、坊主首を淩ひ落さうか。

皆々　サア〳〵〳〵、何とぢや。

ト詰め寄る。順慶、いろ〳〵あつて

順慶　すりや、騙られたか。エヽ、殘念な。いつそ。

ト五郎左衛門へ切つて掛るを、かひ潜つて、順慶を引き摑み、グツと据ゑ

五郎　動きやアがるな、こゝな人外奴が。敵となり、身方となり、義もなく勇も無く、極惡無道の畜生同然。今迄も、生け置く奴（やつ）ではなけれども、先君御寵愛の大名だから、此坊主首を、胴に附け置きしを有り難いとは思はず、小田の四海をしてやらんとは、野太いづくにふ。

ト關の戸を尻目に掛けて

所存があれば、事微細に詮議はせぬ。張本の坊主め、今打ち放す。覺悟ひろげ。

ト突き飛ばす。順慶、又拔き身を取つて

順慶　さういふ汝（うぬ）が白髮首を。

ト切つて行くを、拔き身を挘ぎ取り、下へ引き廻す。順慶、木田平と立廻り、關の戸、キツとなり立つを、二重舞臺にて三人隔てる。小平太、起きて、五郎左衛門へ行くを、五郎左衛門、持つたる拔き身を、

小平太へグッと差しつける。トタンの立廻り、各〻一時にて

帶刀　關の戸樣、これは。

關戸　ムウ。（トこなしあつて）反逆人の筒井順慶。

帶刀　禁廷へ宜しく奏聞。

ト關の戸ヂッとなり。こなし。

小太　こりや身共を何とするのぢや。

五郎　毛唐人へ內通して、日本へ逆寄せにせんと企みの段々。

小平　なんと。

五郎　いらざるてんがう。汝等（うぬら）如きを吟味に及ばぬ。命を助けて追放だ。

小平　ウムン。（トこなし）。

采女　して、この采女は。

五郎　言ひ譯立つまで遠慮致せ。

信雄　この信雄は

五郎　爺（ちい）が同道。

木田 瀧野　枝葉の詮議は

五郎　摺子木で重箱、行き屆かぬが公（おほやけ）の政道。

順慶　なにを、汝（うぬ）。

ト木田平を引きのけて、五郎左衞門へ掛かゝるを、右の拔き身にて、順慶が腹へ突ッ込む。

皆々　これは。

五郎　小田家の吉例、門ん出の（ト順慶が首をポンと斬つて）血祭り坊主。

帶刀　天晴れ。

五郎　ドリヤ、罷らうか。

ト拔き身を拋る。小平太、五郎左衞門へかゝる。五郎左衞門、小平太を蹴据ゑて、頭を擲（は）る。後居（しりゐ）に倒（かへ）るを見て

ハヽヽヽ。

ト高笑ひ、各〻、こなしあつてよろしく

二つ目

柴田旅館の場

登場人物 柴田修理介。河田歩左衞門。三法師丸。禿、文字野。幇間、傳吉。遣り手、おかや。大炊女房、千草。左京妹、白妙。兵庫妹、柏手。宮内奧方、木末。丹前、六法。同、やつこ。大工、嘉助。同、喜三。同、七郎兵衞。同、新吉。同、宇兵衞。同、李兵衞。岡崎藏八。鳴見一學。內膳女房、渚。平手長司玄蕃妹、初花。羅漢の鐵八。瀨川采女。大工、與四郞。下女、おため。大垣大膳。片山左近。小田之助信雄。宅間玄蕃。藤右衞門娘、お豐。傾城、園菊。鹽谷藤右衞門。萩坂主計頭 實は 木田平。在所女、お谷。眞柴久吉。三輪五郞左衞門。侍ひ大勢。軍兵、大勢。

造り物、三間の間、二重舞臺。向う金襖、臆病口、少し小高き上段の間、金骨障子、橫は黑塗り障子。橋がかり折廻り、障子屋體。今出川、柴田が旅館の體。幕の內より、信雄、着付け、壷折りにて、褥に坐りゐる。平舞臺、上の方に、木末、渚、衣裳、裲襠。初花、衣裳、裲襠にて、三方に、盃、長柄の銚子を傍に置き坐りゐる。橋がかりの方に、與四郞、ぼつとせ、木綿やつし、麻上下にて、李兵衞、宇兵衞、

喜三、嘉助、新吉、七郞兵衞、皆々布子木綿、輕衫(かるさん)にて、大工の形(なり)にて坐りゐる。此體にて、めでたき太鼓、唄にて幕明く。

初花 小田之助樣へ申し上げまする。今日、旅館の普請も、成就致しましてござりますれば、あなたにも一献お進め申しませいと、柴田樣の御意。サア、一つお召し上がり遊ばされませう。

信雄 オヽ、某を慰めんとて、柴田を始め、そち達の親切、過分々々。

與四 ハイ、お願ひの者でござりまする。

木末 私しは、安部宮內が妻、木末(こずゑ)と申すもの。

皆々

柏手 私しは、金折兵庫が妹柏手(かしはで)。

白妙 私しは、蒲生左京が妹白妙(しろたへ)。

千草 鳰川大炊が女房千草(ちぐさ)。

渚 堀尾內膳が妻渚(なぎさ)。

木末 信雄樣を、お見舞ひの爲

皆々 參上致しましてござりまする。

信雄 是れは〱打揃うて、忝い。

初花　幸ひ、普請成就の喜びに、家中の子供が、風流の一奏でを、御遊覽遊ばされませいなァ。

信雄　それよからう。此方へ通せ〳〵。

初花　かしこまりました。コレ、そなた衆も見物しや。取次ぎして、やるわいのう。

與四　それは有り難たうござりまする。

ト戸屋の内へ向ひ

初花　申し附けた風流の一奏でで。急いで是れへ。

ト對馬がゝりの鳴り物にて、向うより、丹前六法、衣裳、羽織、焙烙頭巾、大小にて、大盡の姿、花道より本舞臺へ來て、所作の立てやうよろしくあつて、文句にて向うを招く。と奴つか〳〵と出る、花道にてきつと見得宜しくあつて、是れより兩人所作少しあつて、留まり、辭儀する。

皆々　ヨウ〳〵。

信雄　ハテ、しほらしい。者共、出かした〳〵。初花、彼れらに褒美を取らせい。

初花　かしこまりました。コレ、二人共、御前にお禮を申しや。

兩人　有り難うござりまする。

ト信雄方へ辭儀する。

初花　其方衆は、次ぎへ立つて休息しや。

兩人　ハア、。（ト兩人橋懸りへ入る）。

與四　皆の衆、今の子供らが、舞ひを舞うて褒美を貰うたが、此方も踊つてなりと、願ひを聞いて貰はうかい。

宇兵　何を阿呆らしい。コレ、彼處にござるのが、小田之助信雄どのぢやげな。いつそ彼方へ願はつしやれ、願はつしやれ。

信雄　ムウ、某に願ひとは何事ぢや。

與四　ハイ〳〵。私しは、柴田樣の御領地、粟田口に居りまする、大工與四郎と申しまして、此たびの御普請に就きまして、皆御領内の大工共を召寄せられまして、其中に年若な私しを、棟梁に仰せ付られました故、ナニガ大切な役目と存じ、精を出しまして、凡そ三十日餘りに、此旅館の御普請を仕立て上げ、卽ち今日で何處もかも、出來上がりました、所でのお願ひ。コレ、此次ぎは、貴樣替つて云はつしやれ。

李兵　オツと、合點ぢやわい。ナニガ、その三十日が間、夜を日に繼いて、仕立て上げましてござりまする故、内へとては、一夜さも行んだ事はござりませぬ。そこで嬶めが、ちよこ〳〵迎ひにさんじま

鶴陽青城領

する。それなれど、一向私しらには逢はさず、女蕃様が中で叱り散らして、追ひ返さつしやりましたげにござりまする。

嘉助　所で、御普請も出來上がりました事なれば、どうぞ今夜は、去んで、嬶の顔が見たうござりまする。

李兵　ハイ、私しは今年八十に成る、疝氣持ちの親仁が、留守をしてをられまする。

喜藏　私しの母者人は、氣が違うてござりました。けれど殿様より、急な御用とござります故、母者人を押入れへ打込み、錠をおろして參りました。

李兵　三十日の間、ヤレ急げ、急げ、と、御普請はおせきなさる。

喜藏　せめて一夜さ、内へ去なうと思うても、日が暮れると、御門の出入りは叶はず。

新吉　やう〳〵御普請も仕上げました事なれば、

七郎　どうぞあなたが、御挨拶下されまして、

嘉助　今夜はお歸しなされて、下さりませうならば、

皆々　ハイ〳〵、有り難うござりまする。

信雄　ムウ、尤もな願ひ、よいワ、某がよい様に取なし云うて、今宵は皆歸してやらうぞ。

皆々　エヽ、有り難うござりまする。

初花　コレ、與四郎、そんならそなたも、今夜は去にやるかや。

與四　ハイ、私しも、去んで、お勝とお豊が、(ト云はうとして) イヤサ、わしが内へ去んだというて、やもめの事なれば、去んでも誰れも待つ者はなけれども、皆が去にたがるによつて、ツイ、それで私しも。(トぐつ〳〵云ふ)。

初花　イヤ、去にたからう。

與四　エヽ。

初花　外の衆より、其方がひとり、去にたがりやるけれど、去なしやせぬぞや。わしが又金輪際、(ト云はうとして) イヤ、滅多に去なさぬと云うてござるぞや。

與四　そりや誰れがな。

初花　御主人柴田様が。

與四　エヽ。

初花　柴田様も、兄女蕃様も、滅多に去なさぬと云うてをられまするを、あなたが去なしてやれと、御意遊ばす事は、よしに遊ばしませ。

信雄　ヤア。

初花　何ぼうでも、去なす事はならぬ〳〵、なりませぬわいなア。

ト泣く。大工皆々不思議な顔する。與四郎困つた顔する。信雄、推量したるこなしにて

信雄　ハア、讀めた。わりや初花、戀ひぢやな〳〵。

初花　エヽ。

信雄　隱すな。今のそちが五普で、何もかもさらりと、事が判つてあるわいやい。ナア、女ども。

木末　あなたが、あの樣に仰しやるを、隱さしやんすと、却つてわるうございまする。

白妙　又樣子に依つて、わたしらも、共々にお世話致しまするわいなア。

柏手　いつその事に、何もかも、あなたにお話し申さしやんせいなア。

皆々　左樣でござりまする。サア、其樣子云はしやんせいなア。

初花　そんなら是非に及びませぬ、申しまするが、皆さん、笑うて下さりまするなえ。

女皆　何の笑はうぞいなア。

信雄　サア、包まずと白狀せい。

初花　アイ、何を隱しませうぞ。此與四郎が普請におぢやつた日から、テモサテモ、どうやら正直さう

な、よい男と思うたが緣のはし、てんぽの皮とわたしが方から、云ひかけましてござんす。あの人の云ふには、お前の志は、忝うござりますれど、大切な御普請の間に、その樣な淫らな事を、ひよつと兄御が見付けさつしやつたら、大抵の事じやござりますまい。ハテ、御普請さへ、首尾よう仕上げましたら、二三日も逗留の內、願ひを叶へてやり申さうと、コレ。

ト與四郎が手を取つて向うへ連れて出る。

コレ、此口で、誠らしう云やつたに依つて、わしや御普請の出來るのを、今日か〳〵と待つてゐるのに、今日御普請が出來上がつたら、すぐに今宵去なうとは胴慾な、ようもわたしを騙しやつたのう〳〵。

ト與四郎が胸倉取つて振廻す。大工ども腹を立て

幸兵　エヽ、よい機嫌な、色事どころかい。

藤助　此方は半時でも早う、內へ去にたいわいの。

喜瀬　一體また、若いわれを、棟梁にする筈はなけれども、どう氣に入つたやら、玄蕃樣が、われを棟梁に定めさつしやれた。

幸兵　ねそり事を仕出かすと、ぬるい顏でゐながら、誰れあらう、宅間玄蕃樣の妹御を、そゝのかすと